

翻訳

ニコス・カザンザキス (1999) 『ロシア文学史』 アテネ (三)

* Καζαντζάκης, Νίκος (1999) *Ιστορία της ρωσικής λογοτεχνίας*, Αθήνα. (Γ)

福田耕佑 FUKUDA, Kosuke

京都大学文学部非常勤講師

訳者による序文

本稿は、現代ギリシア文学史を代表する作家である思想家であるニコス・カザンザキス による *Ιστορία της ρωσικής λογοτεχνίας* の第七章から第十章までの日本語訳である。先行する序文から第六章までの翻訳は、「福田耕佑 (2018) 「翻訳 ニコス・カザンザキス (1999) 『ロシア文学史』アテネ」 『東方キリスト教世界研究』 2: 32-60. 東方キリスト教圏研究会 .」及び「福田耕佑 (2021) 「翻訳 ニコス・カザンザキス (1999) 『ロシア文学史』アテネ」 『東方キリスト教世界研究』 5: 25-62. 東方キリスト教圏研究会 .」で行った。尚、福田 (2018) の「訳者による序文」の中でこの著作を翻訳することの意義を述べたが、ここでも簡潔に本翻訳の意義を述べておきたい。

従来ニコス・カザンザキスの文学並びに思想に関する研究は西欧思想とカザンザキスの関係に焦点を当てたものが多く、カザンザキスとロシアの関係はギリシア国内においても顧みられることが少ない。特にロシア文学史にはカザンザキスのロシア観とロシア文学から受けた影響が直接的な形で表現されているにも関わらず、諸外国語に翻訳がないばかりか、研究の遡上において正面から論じられることもなかった (Φιλίππιδης 2017: 143-180)。

だが本稿によるこの翻訳には無論カザンザキス文学研究における重要性があるばかりではなく、ギリシア文学研究の枠を超えたロシア文学研究における領域でもロシア文学が外国の文学にどのような影響を与えたのか、またロシア文学が外からどのように見られたのかを明らかにしてくれるという点で有益な資料の一つとなろう。

本翻訳分の第七章ではプーシキンと同時代に活躍した作家たちの生涯と作品を紹介している。

* Νίκος Καζαντζάκης (1883-1957) : 1883 年にクレタ島に生まれる。1906 年にアテネ大学法学部卒業後パリに留学し、ベルクソンやニーチェの哲学に触れる。12 年バルカン戦争に従軍し、17 年ヨルゴス・ゾルバスと共同で鉱山経営を行う (失敗)。19 年セフェリス内閣で厚生局局長として南ロシア、コーカサス地方のギリシア人難民の本国帰還支援に携わる。22 年ウィーンで仏教を、そしてフロイト研究を行う。次いで共産主義に傾倒し、三度にわたるロシア訪問を経て共産主義の限界を悟る。以降執筆と旅行に没頭。第二次世界大戦期はレジスタンス活動に従事し、独軍撤退後はソフリス内閣へ入閣する。48 年からはフランスに移住し、執筆に専念する。57 年フライブルクで客死。

第八章は前章を受け、プーシキンの後継者の中でも最重要な人物として特にレールモントフとゴーゴリの二人を取り上げ、作品と生涯、そして彼らの業績と影響を詳述している。そして第九章ではカザンザキスがギリシアとの比較においても大きな関心を抱いたスラヴ派と西欧派の対立を取り上げ、最後に第十章では「ロシア・リアリズム」と称し、小説家にゴンチャローフやトゥルゲーネフ、そしてレスコフ、劇作家にオストロフスキー、そして詩人としてネクラーフなどを取り上げて紹介している。適宜ロシア語風での表記と、可能な限りキリル文字での表記及び原文を提示したいギリシア語を【】によって記載している。

第7章

プーシキンの同時代人

1. 詩人

クルィローフ【Крылов】の寓話【μύθο】『猫とナイチンゲール』【Кошка и соловей】に登場するナイチンゲールのように、文学【φιλολογία】はニコライ一世の暴政の爪の間でもがいていた。ロシア全体が、服従と死の暗黒の支配する広大な兵舎である。

プーシキンの周囲では、この暗闇の中でも彼の足跡を追いながら星々が輝いていた。批評家で風刺的な詩人のピョートル・アンドレエヴィチ・ヴァーゼムスキー【Пётр Андреевич Вяземский】(1792-1878)。抒情的で快樂主義的な、プーシキンの親友でもあったアントン・アントーノヴィチ・デリヴィク男爵【Антон Антонович Дельвиг】(1758-1831)。疲れ知らずな酒と恋愛の称賛者であるニコライ・ミハイロヴィチ・ヤズィコフ【Николай Михайлович Языков】(1803-1846)。詩作の目的を神性との統一に置いていた神秘主義者のドミトリー・ヴラディーミロヴィチ・ヴェネヴィティノフ【Дмитрий Владимирович Веневитинов】(1805-1827)等が挙げられる。

しかし、詩人たちという昂の中で最も豊穡で美しかったのは、エヴゲーニー・アヴラモヴィチ・バラティンスキー【Евгений Абрамович Баратынский】(1800-1844)であり、プーシキンの同時代人全ての中で最も興味深い詩人であった。彼の文芸技術の理想は、ゲーテのように、思考と感性の統一であった。ゲーテの死に際してバラティンスキーが書いた詩は有名である。他者の生を必要としないほどに豊穡で完全であった偉大なドイツ人の生を称賛している。だが、来世というものがあるとして、ゲーテが適合させ従えさせることのできないような生においては何も存在しえないであろう。

他の詩においてバラティンスキーは、真理が自分の前に現れ、これが人間的情熱の各々を消し去って如何なる波の立たない静寂を与えると約束してくれたのだと空想する。だが詩人はこの創造を追い払った。これの有する光が死のランプであり、これの有する静寂が墓の有する静寂のように思われたのだ。「私を放っておいてくれ。お前の厳密な知識から—如何なる成功も花開きはしないだろう—決してお前を追いかけはしない—私の道を歩ませてくれ—この道を私は一人で追い求めよう—私は壮健だ！ いや、そうでない！ 我が星の輝きが—天で青ざめる時には—私の心がもはや—かつては愛していたのだということを忘れてしまう時には—その時には、お前の魔法の言葉を言いに来てくれ—私の理性に火を灯し—生を軽蔑しながら、不満も言わずに—永遠の夜へと行かせてやってくれ！」

バラティンスキーの生涯は、若いうちは苦く困難に満ちていた。軍隊に組み込まれ、四年間

(1820-1824) フィンランドで兵役に就いた。厳格で単調な北方の景色は、彼の生涯に大きな影響を与えた。「この国が、我が詩作の母である。私にはたった一つの野心しかない。未来の詩人たちが我が詩の記憶に対しフィンランドを尋ねにやってくることを願う」と書いている。フィンランドの荒野でバラティンスキーが書いた主要な作品『エダ』【Эда】は真に奇跡的であるが、それは感動的な恋愛の語りの故だけでなく、フィンランドの自然が描写されるその絢爛さの故にでもある。

1825 年末、バラティンスキーは士官に昇進し、後にモスクワの官吏に任じられ、そこで家庭人としての幸せな生活を過ごした。バラティンスキーは偉大な同時代人プーシキンも苦しんだことに苦しんだ。文芸技術が成熟して浪漫主義的で不確かな冒険から解放されていけばいくほど、大衆を好まなくなってしまう、ということだ。叙事詩『舞踏』【Бал】と『ジプシー女』【Цыганка】の中で、バラティンスキーは余りにも情け容赦のないリアリズムをもって同時代の社会を描写したので、批評家たちによって激しく倫理的・古典的技芸の名において攻撃を受けた。詩人本人も公平な判断をもって自身の作品を批判した。「我がムーサに目を眩まされたのではない—わかっている。彼女が美しいとは思われていないことは—かろうじて若者が大胆に、乗り越えていこうとしながら—彼女に官能に満ちた視線を投げかける。—我がムーサには—からかう様な目で—飾りと平静でもって幻惑することも—出来もしなければ欲もしない。—だが、あなたが—瞬でも—彼女の顔の見慣れぬ優美さを見る時には—そして彼女の穏やかで思慮に溢れた言葉を聞く時には—その時には、おそらく、彼女を軽蔑し馬鹿にする代わりに—彼女の徳を識るようになることだろう」

際立った人物として、デカブリストの五人の指導者の内の一人であり、1826 年 6 月 13 日に銃殺された、革命詩人コンドラチー・フョードロヴィチ・リュレーエフ【Кондратий Фёдорович Рылеев】(1797-1826) がいた。リュレーエフはロシアで初となる、明確に政治的な詩人である。この時までの他の詩人たちにとって、政治的テーマとは時折彼らの詩作に熱を帯びさせてくれる祖国愛的な感覚のことであったのだが、リュレーエフにおいては彼の文芸技術にのみ奉仕するような目的にまで高められた。友人のベストウージェフに詩を一篇捧げながら、本人がこのように告白する。「アポロンの子息であり厳格な批評家としては—君が私の詩に多くの技巧を見出すことはないだろう。—しかし、私の感性は力強く真実である。—私は政治家であって、詩人ではないのだ」

1820 年、リュレーエフは『寵臣へ』【К временщику】という世間を騒がせた詩を出版した。ここでは、狂気の如き勢いと英雄的に大胆な語り口で「低俗な追従者」であって「狂った独裁者」、そして皇帝の寵臣であったアレクセーエフ【Алексеев】を打ちのめした。「民衆【ο λαός】が圧政の轡を振りほどく日が来るであろう。そうなれば、寵臣たちにはどれほどの不幸が待ち受けていることであろうか！」と革命詩人は言及する。

リュレーエフの友人たちは震えあがり、瞬間毎に「巨人ゴリアテに打って掛った大胆な小人のようなダヴィデ」の死が訪れると思っていた。しかし、寵臣の描写はおぞましく侮辱的だったの

だが、アレクセーエフは、自分がこの詩の中に自分自身を読み出したことを見せないように、この詩人の迫害を恥じた。

リュレーエフの政治的信念は『市民』【Гражданин】という他の詩でより大きな反響があった。「否、否。私は、自分の若さを消耗して燃え盛る魂を抱きながら圧政の軛の下で枯れ果てても、快樂の腕の中に、そして不名誉な怠惰に捉われはしない。人間の自由のために戦う準備をせよ！民衆【ο λαός】が目を覚ました時に諸君が放蕩にふけて怠惰に過ごしている様を見出せば、そして民衆が自身の権利を求めて闘うために起き上がるこの若者たちの内に、一人のブルトウスも見出さなかったとすれば、諸君は恥じ入ることになるだろう！」

最も有名ではあるが、文芸技術の観点から見れば最も不格好なリュレーエフの作品は『思考』【Думы】である—ウラディーミルからエカチェリーナ大帝時代までの、ロシア史の英雄たちの一連の浪漫主義的なポートレートである。これらの詩は、栄誉と祖国愛【πατριωτισμού】、そして自由といういつも同じモチーフを単調に強調してはいるが、歴史の記述としては何ら正確な物ではなく、皮相的で浪漫主義的であり、情熱に満たされている。

リュレーエフは牢屋の中で木の葉の上に一本の針で最後の詩を書いた。「一体全体私は外国に追放されてしまったのか—いつこんな生活は終わるのだろうか—誰か私を連れ出してくれる翼を与えてくれないだろうか—向こうへ、平穩の永遠の王国へ—世間とは墓場だ。—精神は肉体からの解放を望んでいる。—嗚呼、主よ。私はあなたの王座の前に跪きます。—私の苦痛の腸から—私の叫びが飛び出します！—私の友人たちが救済を見出すのを助けて下さい。—私の罪をお許してください—私の疲れ切った魂を自由にしてください！」

プーシキンと同時代人の他の二人の詩人に、ポレジャーエフとヴェネディクトフという記憶すべき重要な人物がいる。

アレクサンドル・イヴァノヴィチ・ポレジャーエフ【Александр Иванович Полежаев】(1805-38)は風刺的な詩と主にユーモアあふれる『サーシカ』【Сашка】という叙事詩を発表し、その中で大きな自由と大胆さを備えた学生の生き方が描かれた。皇帝はこの詩を知り、この詩を朗読させるために彼を呼んだ。不運なポレジャーエフは宮殿に行って自分の詩を朗読した。皇帝は彼の額に接吻し、すぐさま彼を軍隊に、単なる一兵士として「矯正のために」送りつけたのだった。

不幸な詩人は軍隊で余りに多くを忍従したので、慰めを見出すために酒を飲み始めた。時折、醜態して上官を非難し、牢に放り込まれることもあった。そこで彼が被った受難【μαρτύρια】は筆舌に尽くしがたい。しかしながら、素晴らしい戦争と恋愛の歌を書いた。そして肺結核に侵され始めた時に、傑作『人生への告別』【Прощание с жизнью】を創造したのだった。

彼の体はもはや病と飲酒によって疲れ果てていた。不運なポレジャーエフは下士官に昇進した数週間後に死んでしまった。称賛者たちは後に彼の慰霊碑を建てたが、彼がどこに葬られたのかを明らかにすることは叶わなかった。こうして、詩人の「石も十字架も、決して私の慰霊碑を通りがかる者に示すことはないであろう！」という預言的な詩行が実現したのだった。

この同じ時期に、ナポレオンの侵攻頃のモスクワの有名な放火犯の花嫁であり、「ローサ・サッ

フォー」の綽名を持つエヴドキヤ・ペトローヴナ・ロストプチナ伯爵夫人【Евдокия Петровна Ростопчина】(1811-58)が現れた。まだ幼い時からカルロタ・コルンデに情熱的な讃歌を書いたのだった。あの厳格な批評家であったベリンスキーも称賛した、多くの詩、とりわけ恋愛ものを多く発表した。しかしこれらの詩は、皮相的であまりに感情的であり、今日では何らの価値のないものである。

プーシキン同時代人のあらゆる詩人たちの中で、極めて格別な地位を獲得したのが、アレクセイ・ヴァシーリエヴィチ・コリツォフ【Алексей Васильевич Кольцов】(1808-42)である。コリツォフは初めて民衆【το λαό】から出た重要な詩人であり、彼の詩作は深く民衆の魂【λαϊκή ψυχή】に根差していた。彼の歌は真に民衆的な歌【λαϊκά τραγούδια】であり、その質素な形態においても、その深い感性においても申し分なかった。コリツォフは民衆の訛り【τόνο】を上手に真似る貴族や都市民ではなかった。彼は農民であり、その魂はその直接の言語として民衆の歌【λαϊκό τραγούδι】を有していたのだ。そのため、コリツォフは文学【φιλολογία】や哲学を何度も作品の形にしようとしてきたが、自分の株の下落を招くことになった。飾り気の無い詩人であり、思索して像による創造を行った時、この時にのみ議論の余地のない価値を有していたのであった。

コリツォフの父親は裕福だが無教養な家畜商人であり、アレクセイは小さい時から父親を手伝っていた。しかし、学習欲に渴きだし、時間がある時にはその時手にした本を読んでいたのだった。初めて詩集を読んだのは十六歳の時であった。あまりに熱中して、もう詩行しか読みたくない程だった。少しずつ自分でも詩行を作り出し始めた。

十八の歌からなる彼の初めての詩集は、格別な印象を与えるものであった。彼はペテルブルクに呼ばれ、そこに赴いてバラライカの調べで自分の詩を朗誦し、ベリンスキーやプーシキン、そしてジュコフスキーやクルィロフと面識を得、皇帝にも拝謁した。

自分の村に戻った時、コリツォフは生きることを強いられる粗野な生活に耐え切れなくなった。同時に彼の愛していた極めて美しい女性が村から追い出され、詩人は激しい悲しみの虜になり、病に伏し死の危機に瀕した。回復の後、至る所に失われた愛を探し求めるようになった。あらゆる取り組みを放棄し、詩作だけが慰めとして残った。まさにその時、ギリシア革命から靈感を受けて『囚われのギリシア人』¹を書いたのだった。しかしすぐに、悲しみに疲れ果ててしまい死んでしまった。

コリツォフの全作品の内、八十程の歌はロシア詩の不滅の宝である。この詩人程に、純朴さと質素さ、そして誠実によって農民の生活を——どのように農民が生き、どのように喜びと苦痛

1 管見の限りコリツォフ全集においても該当の作品は存在しない。しかしイヴァン・コズロフ【И. И. Козлов】(1779-1840)という詩人に『暗闇に囚われしギリシア人』(Пленный грек в темнице, 1822)という作品があり、これを指しているのではないかと思われる。これをコリツォフの作としているのはカザンザキスの事実誤認である可能性が高い。

を享受し、またどのように愛するのかを——示した者は決してなかった。ロシア語が生きる限り、トゥルゲーネフ曰く、コリツォフのいくつかの歌は不死であり続けるだろう。

2. 散文作家

プーシキンの時代の散文作家は、浪漫主義と歴史主義、そしてリアリズムという三つの異なる道を辿った。

1. 浪漫主義派の主要な代表に、ホフマンの熱烈な称賛者であったヴラディーミル・フォードロヴィチ・オドエフスキー【Владимир Фёдорович Одоевский】(1803-69)がいる。しばしば現実と想像の二つの世界を一つにし、移り気な浪漫主義的要素をリアリズム的な描写に導入している。

彼の語りに特徴的なのは「即興者」である。若き詩人は魔法で驚くべき程簡単に即興で詩行をつくり出す能力を得たと同時に、「全てを見て全てを知り、全てを考える」という天与の才も得た。一つ目の天与の才により、至る所で称賛を巻き起こした。素晴らしい詩を即興で作る、大金持ちになった。しかし二つ目の天与の才により、人生が毒気に犯されることとなった。全てを解体し、あらゆる活動の舞台裏を見て世間を分析するが、これを再構築する能力は持ち合わせていなかったのだ。愛する妻が微笑んだ時でも、彼は微笑みを生み出した筋肉と神経の痙攣を見るのであり、ヴァイオリン奏者がヴァイオリンを演奏した時も、弦を作るために腸を出した動物と腸の全加工過程の方に目を向ける。

より浪漫主義的な人物として、ポゴレリスキー【Погорельский】という筆名で有名なアレクセイ・アレクサンドロヴィチ・ペロフスキー【Алексей Александрович Перовский】(1787-1836)がいる。短編『分身、或いは小ロシアの夜』【Двойник, или Мои вечера в Малороссии】は生き生きとした喜びに満ちており、そして中には『黒い雌鶏、あるいは地下の住人』【Чёрная курица, или Подземные жители】のように今日でも読む価値を保持しているものもある。

擬浪漫主義的で笑いと言張りに満たされている人物として、リュレーエフの友人で、帝国の要塞の輝かしい士官で高名な女性たちの征服者である、アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・ベストゥージェフ【Александр Александрович Бестужев】(1795-1837)がいる。彼の主人公たちは情熱的で激情的であり、彼が描写した恋愛は全て血なまぐさいものであった。しかし、ベストゥージェフは文芸技術をもって語り、大きな関心を掻き立てた。

2. ホフマンが十九世紀初頭のロシア人散文作家たちの浪漫主義的な方向性における模範であったが、ウォルター・スコットは歴史派の模範であった。ミハイル・ニコラエヴィチ・ザゴスキ【Михаил Николаевич Загоскин】(1789-1852)は1829年に有名な小説である『ユーリ・ミロ斯拉フスキ、或いは1612年のロシア人たち』【Юрий Милославский, или Русские в 1612 году】を発表した。登場人物の描写は皮相的であり、この作品の歴史的価値はゼロである。ただ生き生きとした

言語にのみ価値を有するものである。

ザゴスキンのによるヴラディーミルを主人公としている『ロスラヴレフ、或いは1812年のロシア人たち』【Рославлев, или Русские в 1812 году】や『アスコルドの墓』【Аскольдова могила】といった残りの小説も、同じ欠点と長所を有している。

イヴァン・イヴァノヴィチ・ラジェチュニコフ【Иван Иванович Лажечников】(1794-1869)は歴史小説の著者として大きな名声を獲得した。彼の小説の中で最も有名な物として『最後の貴族』【Последний новик】がある。そこでは、ピョートル大帝の征服遠征が描かれている。また『氷の家』【Ледяной дом】はアンナの宮廷(1730-40)で全能の力を有していたドイツ人たちとロシア人の闘争を詳細に物語っている。

ラジェチュニコフは極めて巧みに自身の主題を利用し、抑えきれない程の関心を引き起した。しかし、歴史的正確さも心理的な力も彼の特徴とはなりえない。

3. レアリズムという三つ目の派閥の主要な代表は、ウクライナ人のヴァシーリー・トロフィーモヴィチ・ナレージヌイ【Василий Трофимович Нарезный】(1780-1825)であり、ゴーゴリの先駆者とみなしうる。彼の偉大な小説に『ロシアのジルブラズ』【Российский Жилблаз】がある。リアリズムとユーモアをもって、あらゆる社会階層と出会い生きていく貧しい王子の、好奇心を掻き立てるような冒険を描いている。

他の小説でもナレージニーはウクライナの故郷を描いている。アカデミアの異常な習慣と学生たちの飲み会といった、主に十七世紀頃のキエフのアカデミアの描写は輝かしいものであった。『黒い年、あるいは山岳の公たち』【Чёрный год, или Горские князья】では、ナレージニーはロシアから国土を征服した後に(1801)、ジョージアに行ったロシア人官吏たちを力強く風刺している。

有名なジャーナリストであるファデー・ヴェネディクトヴィチ・ブルガーリン【Фаддей Венедиктович Булгарин】(1789-1859)は、処女作『イヴァン・ヴィジギン』【Иван Выжигин】においてこれら様々な方向性の総合を達成しようと欲した。著者本人が序文の中で自身の主人公を説明した。「私の主人公は生来善良な人間だが性格は弱く、その都度の状況に大きく左右され、結局は常に、最も頻繁にこの世間で私たちが会おう様な人間なのである」

実際ブルガーリンの主人公は、理想となる典型でもなければまた現実的な風刺でもない。作品の第一部ではリアリズム的な力を込めて、孤児のイヴァンが養育されたポーランドの裕福な封建領主の地所を描き、第三部では官吏や都市民、そして地主といったあらゆる典型と共に地方都市を精緻に描写した。その描写は極めてリアリズム的で力強かったため、しばしばゴーゴリの「死せる魂」を喚起するほどである。他の失敗に終わった派閥——浪漫主義、歴史主義、リアリズム主義——を結び付けようとしたあらゆる努力以上に、この小説は大きな成功を収めたのであった。

同時に1820年から1830年代の後に、暴力的で敵意に満ちた文芸批判【φιλολογική κριτική】が支配することになる、多くの文学雑誌【φιλολογικά περιοδικά】が現れた。作品の外的形態に関する論争はなくなっていき、作品が含む諸思想について論争し始めたのだった。

明白にロシア浪漫主義の使徒だと判断された人物にニコライ・ポレヴォイ【Николай Полевой】(1796-1846)がいた。彼はシベリアのイルクーツクに生まれ、ロシア人たちが外国の文学【φιλολογία】に触れやすくなることを目的として『「モスクワ・テレグラフ」【Московский телеграф】という文学【φιλολογικό】雑誌をモスクワで創刊した。バイロンやユーゴー、ホフマンやウォルター・スコット等を翻訳した。しかし何よりも、文人【λογοτέχνη】と歴史家として、ポレヴォイのカラムジンに対する極めて鋭く厳格な批評は特別な価値を有するものである。

同じ時期の興味深い批評家として、モスクワ大学の教授で『テレスコープ』【Телескоп】の発行者であったニコライ・イヴァノヴィチ・ナデジディン【Николай Иванович Надеждин】(1804-56)が存在する。シェリングの忠実な信奉者であったナデジディンは、浪漫主義と古典主義を文芸技術の「総合的」概念に到達するために昇りつめて越えて行かなければならない二つの階梯とみなしていた。しかし、これら未完の美学理論と論争は、中途半端に教養を受けた社会を疲れさせ、彼の時代に極めてわずかな影響しか与えられなかった。

反対に社会に対し広範で大きな影響力を持ったのは、三人のジャーナリスト同士でプーシキンが「三頭政治」【Триумvirat】と名付けた、ブルガーリンとグレーチ、そしてセンコフスキーであった。

ブルガーリンは小説『イヴァン・ヴィジギン』の著者であり、ポーランド人でペテルブルクに定住し、常に反動勢力の階層に背を向けて、デカブリストたちの血にまみれた失敗のように、自由主義的なものに従事した。

彼は雑誌『北の蜜蜂』【Северная пчела】を発行したが、大衆【μεγάλου κοινού】の好みに完全に合致したが故に忽ち広範な普及を獲得することになった。ブルガーリンはロシアでよく購入された初めてのジャーナリストであるが特徴のない人で、卑屈な情熱しか持ち合わせておらず、批評の価値の無い者だとみなされている。

より教養があり論争的でなかった者として、ブルガーリンの協働者であったグレーチ【Греч】(1787-1867)がいる。『ロシア語文法』【Краткая русская грамматика】とロシアで初となる『ロシア文学簡史の試み』【Опыт краткой истории русской литературы】を書いた。

センコフスキー【Сенковский】(1800-58)は更に多産であった。彼のモットーは「陽気に書け！」であった。

何年もの間「三頭の蛇」は、公衆【κοινό】が無教養で趣味が悪く、より良い批評に興味を持ち得なかったことにより全能を誇っていた。この三頭の巨人の力は、最終的にロシア批評家のヘラクレスとも言うべきベリンスキーが現れるまで続いたのであった。

しかし、ロシアのこの偉大な批評家を取り扱う前に、プーシキンの隣に立つ、最も偉大な二人の人物のもとで立ち止まらなければならない。詩人レールモントフと偉大な散文作家ゴーゴリの下にである。

第8章

レールモントフ, ゴーゴリ

プーシキンと同時代のあらゆる詩人たちの中で、比較するまでもない程に優れた人物にミハイル・ユーリエヴィチ・レールモントフ【Михаил Юрьевич Лермонтов】(1814-41)がいる。彼の父親は大した人物ではなく軽薄だったが、美男子な士官であり、妻が亡くなった時には、ミハイルは横柄で横暴な祖母により田舎で養育された。

祖母は目に入れても痛くない程に彼を溺愛し、自分の孫は偉大な人物になるのだという確信、つまり、この大地における優れた使命を抱いて養育した。このような養育によってレールモントフは駄々っ子で、名誉心が強く苛烈な性格になってしまった。田舎の僻地においても病気がちだったが、極めて早熟に育ち、黙ったまま自分の中に閉じ籠ることを学んだ。十四歳の時から多くの抒情詩と叙事詩、そして演劇と物語を書き始めた。重苦しい陰鬱から自分の魂を軽くし、痛ましい内面的な闘いに出口を与えるために書くことを通して戦っていた。

というのも、若きレールモントフの生活は、外面的な快適さとは裏腹に全く幸福なものではなかったのだ。暴君のような祖母は、彼の父親を死ぬ程に憎く、孫から息子の親としての愛情を根こそぎにしてしまいたがった。しかし、彼は父親のことを愛していたので、忍耐した。「私には、ある演劇の中で書いたのだが、ここ、蛇の中で豊かな食卓にふんぞり返って生き、父の血の涙でパンの一かけ一かけを買い戻すなどと考えるよりも、むしろ自分が愛する人々と共に生きて外国のパンを食べる方がよいのだ」

この苦々しい少年期におけるレールモントフの偉大な文学的【φιλολογική】崇拜と慰めになっていたのがバイロンであった。バイロンを人生の模範として置き、「私は若く、心は沸き立っている——バイロンの月桂冠が欲しくてたまらないのだ……。彼の精神は私のものであり、彼の黒い苦痛も私のものである——嗚呼、彼の優れた運命も私のものであれば！」

レールモントフの学生時代もまた静かに孤独に過ぎ去った。同級生たちの理想主義的な行動に交ざることには全くなかった。死の予兆が魂に重くのしかかり始め、死ぬ前に居場所を見つけて名誉を享受することを切望していた。

突然、学業を放り出してペテルブルクの騎兵学校に入隊した。学校への失望、そして後には軍隊への失望は大きかった。同僚たちは皆粗野で彼よりも劣っていた。初めは彼らを無慈悲に風刺したが、後には共に放蕩生活に身を投じ、軽やかであると同時に隠れた詩や憂鬱な詩行、またシェイクスピアに影響を受けた演劇を書き始めた。

プーシキンの死はレールモントフに極めて深刻な影響を与え、彼を無価値で皮相的な生活から解放することになった。どれほどこの詩人の価値が大きく、どれほど早く死んでその作品が断ち切れてしまったのかを見て、彼の中で再び自分も早く死ぬことになるのだという痛々しい予感が怒り狂った。プーシキン告別の葬儀の詩によって即座に名声を得た。しかし、同時に上流社会

の憤慨を引き起こすことになり、二十三歳だった詩人はコーカサスの軍隊へ罰として移動させられた。

レールモントフのコーカサスへの追放が長く続くことはなかったのだが、自分もプーシキンのように優れた作品を遺せるよう全身全霊をかけて詩作に打ち込もうという決心を後押しした。高い山々、迸る急流、未開人と変わらない民衆【λαοί】といった、周囲の壮大な自然が深い印象を与えた。自分の魂が野生の始原的自然と同族であることを誇りに思ったのだった。

バイロンの軛から自由になることは決してなかったが、彼の技芸から独立するために戦い始めた。「否、私はバイロンではない。私は別人だ—ムーサに選ばれてはいるがまだ有名ではない—私も世間から追い出された—しかしロシア魂【ρωσική ψυχή】と共にだ。—初めは若かったのだ。若くして終わろうではないか—私は大きな仕事を達成することはないだろう。—大海におけるように私の魂の奥底には、私の打ち砕かれた希望が横たわっている。—暗黒の大海よ—誰があなたの秘密をまき散らし得ようか—私は神だ。他の何ものでもない！」

コーカサスで純朴な兵隊や民衆と触れ合い、最も美しい作品の内の一つ『皇帝イヴァン・ヴァシーリエヴィチの歌』【Песня про царя Ивана Васильевича】を書いた。レールモントフは、驚くべき程に昔の英雄歌の感性と思考、そして文体に躍動を与えながら、バイロンの叙事詩を復活させることに成功した。しかし、若き詩人は狂想曲【ραψωδών】の純朴な叙事詩と自分自身の独創に演劇的な壮大さを付け加えたのだった。

ブイリーナ【βυλίνας / былина】におけるように、饗宴の様子を描写する歌を始めた。皆陽気であったが、ただ皇帝の寵愛する護衛のキリベエヴィチ【Кирибеевич】だけは悲嘆にくれていた。雷帝イヴァンは怒り、その目は「矢の如く」若者を打った。しかし、若者は首を上げなかった。皇帝は怒って王笏を床に打ち捨てたが、若者は不動のまま自分の悲しみの中に沈み込んでいた。そこで皇帝は声を上げ、若者は夢から揺り起こされる。「月が上る時、星々は喜ぶ！ —なぜ汝が王の喜びに陰りをさそうとするのか。—イヴァン・ヴァシーリエヴィチ様、若者は答えましょう—心の火災が消えないのです。葡萄酒をもってしても……—私の馬に騎乗する時—腰元の帯にきつく締めつけられているのです—そして、私はピロードの縁なし帽を斜めにかぶっています。—既婚者も未婚者も皆—私に自慢し陰口を叩きます。—たった一人の女だけが私のことを見ようと目を上げもしないのです！ —白鳥のように歩き回り—彼女の目は鳩の目のようにまるやかです—そして、彼女の声はナイチンゲールが語っているかのようです。—彼女の名はアリョーナ・ドミトリエヴナ【Алёна Дмитриевна】と申します！ —皇帝イヴァン・ヴァシーリエヴィチは笑って言った—よかろう、美男子よ。—私がこの痛みからお前を解放してやろう……—ルビーの指輪をはめた私の指を取れ—真珠を散りばめたこの首飾りを取れ—そしてこれらをアリョーナ・ドミトリエヴナに送るがよい」

若者は沈黙したが、愛する女性が裕福な商人ステパン・カラシュニコフ【Степан Калашников】と既婚だとは恥ずかしくて言えなかった。歌の第二章は商人の家で劇が進んでいく。カラシュニコフは夕方に帰宅し、自分の妻が見えないことに驚いた。真っ青になって動揺していたアリョー

ナ・ドミトリエヴナは遅くに帰宅した。道中キリベエヴィチに掴まれて、彼の恋心を告白され、抱き着かれ抱擁されたのだと語った。この商人は復讐心を抑えきれなかった。二人の兄弟を呼んで、この恥について語り、翌日キリベエヴィチと戦うために闘技場へ出るつもりだと告げた。もし彼が殺されれば、その時は二人の兄弟は復讐の業を続けることになるだろう。「あなたは私の父親です、二人の兄弟が答えた、望むようにしてください。私たちはいつもあなたと共にいます！」

歌の第三章はこの戦いについて描写している。キリベエヴィチは闘技場に出て挑発する。カラシュニコフが姿を現した。横柄な戦士は皮肉を込めて「死すべき者たちが何を覚えておくべきか知るための名は、何というのかと尋ねた」。カラシュニコフは「震えあがっている皇帝へーそれから白いクレムリンと聖なる教会へー最後にロシアの全民衆【λαός】へ挨拶を送る。ー我が名はステパン・カラシュニコフだー両親は名誉のある者であり、私を立派に養ってくれたー私はいつも神の命に従ったー決して他人の妻に手を出したことはない！」

決闘が始まり、カラシュニコフはキリベエヴィチを殺害した。皇帝は勢いよく飛び出したが、直ちにカラシュニコフを捕らえるのはためらった。「私は真実を告白したー故意にかそうとは望まずか、お前は殺してしまったのかー我が最良の男を。ー私が意図して彼を殺したのだー正教の皇帝よ！ーだが何と言うべきか、私はあなたに語りはしないだろうーただ神にのみ語ろう！」

イヴァンは、カラシュニコフの自由に話す態度は気に入っていたが、「斧を剃刀のように砥いでおけー市民は自分の持っている中で最もよい服を着てー大きな鐘を打ち鳴らせーモスクワにいる全ての者がー私の意志がお前をも庇護しているのだということを知るために」——という勅命を出す名誉を与えるため——彼を打ち首にするように命令した。

レールモントフのこの歌は、ロシア文学【φιλολογίας】の中でも最良の作品の一つだとみなされている。ベリンスキーは「如何なる単語、如何なる詩行、如何なる形象にも余分な物がなく、この歌には如何なる欠陥もない。ここにおいて全てが必然的で充足している」と書いている。

レールモントフはペテルブルクに帰還し皮相的で世間的な生活を始めた。しかし、今や自分を深く取り巻いている魂の無い人々から自分を隔てている断絶を感じたのだった。彼には愛することも憎悪することもできず、自分自身が本人をこの世で余計な存在だと感じているのだ。「私たちは静かに彷徨い、忘れ去られ、名前もなく、未来の世代に何ら優れた精神的な萌芽も残してやることもない」

生活の荒廃した暗黒期にあって、レールモントフは有名な大作詩『悪魔』【Демон】を終えた(1839)。同時に小説『現代の英雄』【Герой нашего времени】も入念に練り込み、多くの抒情的な詩を発表した。その全ての名が栄誉あるものになった。しかし、彼の生活はますます耐えきれないものになっていった。フランス大使の息子と決闘し、再びコーカサスに追放された(1840)。「ロシアは壮健だー奴隷たちの国、暴君たちの国。おそらく彼方、コーカサスに頂にあってーお前のパシャたちからー全てを待ち受けている彼らの目からー全てに聞き耳を立てている彼らの耳から、私はすり抜けていくことだろう」

自由への欲求を『ムツィリ』【Μιτςυρι】という詩に体现した。主人公は、ロシア人士官によって発見され、修道院に預けられた孤児のチェルケス人【Κερκεζος / Черкес】である。修道士たちは愛を注いで養育したが、若者の心には逃げ出して自由なステップに帰りたいという欲求が沸き立っていた。彼は修道院から脱走し、山々を彷徨い、豹との戦いで死の危険を犯し、飢えて絶望し、道にも迷った。突然、疲れ切ってしまった彼は山の迂回路²で、恐ろしいことに再び修道院を目にすることになり、おぞましい鐘の音を聞いた。彼は気を失い、修道士たちに見つかつて再び僧房に運んだ。死に際してなお逃亡を改悛しておらず、この逃亡が死をもたらすことになった。宗教上の老師に告白したように、自分の目で「人間が自由のために生まれたのかそれとも隷従のために生まれたのか」を見て感じるために逃亡したのだった。—「言いたいことを言えばいいのだ、哀れな老師よ。短い間だったが、幸運な時期は暖かく、喜びに満ち、波立つ胸の嵐との接触は苦痛だった。しかし、あなたがたの閉じ込められた生活が同じものを与えうるだろうか」

彼の有名な詩である『悪魔』の中では、罪深い偉大な魂が自身の救済と自由を求める。コーカサスの壮大な景観の中で、悪魔はタマラ【Ταμαρα】という乙女を愛し、悪魔の魂が変化することになる。救われたいという恐ろしい渴きに支配されるようになったのだ。

「僕は暗くて一言も語らぬまま—絶世の美しさをもった—彼女の枕元に屈み込む。そして、彼の目はかくも愛慕と—かくも悲しみに満ちて彼女を見ていたので—あたかも彼女を心の底から愛していたかのようだ。—彼は天使ではなかった—巻き毛で飾り立ててもいなかった—色とりどりの光の輝きは—光の濁った宵に似ていた。—彼は昼でも夜でもなかった—陰でも光でも」

乙女は修道女になったが、体は寝付くことができず、痛ましい考えが心をひっそりと魅了した。祈ることもため息をつくことも、花の咲いた果樹園や香りを放つ山々を通して見上げることもできなかった。彼女の心は誰かを待っていたのだ。

或る晩、悪魔は大胆にも修道院に近づき、木の葉が騒めいた。彼は目を上げて修道女タマラの明かりのついた僧房を見た。甘い音楽を耳にして天を思い出して震え、逃げ出したくなかったが、翼が動かず、太い涙の一筋で目が濁った。「今日でもまだ修道院の近くで—お前は見る事ができるだろう—この涙の炎で真黒にやけた石を—そしてこれは人間の目から落ちることはなかった」

悪魔は僧房に入り込み、彼の魂は幸運を欲し、新しい人生の時がもう来たのだと感じた。しかし、光の天使が飛んできて翼で乙女を覆い隠した。悪魔の目に火が付き、彼の中で昔の情熱が再び飛び出した。—「彼女は私の物だ！」天使に向かって叫んだ。「天使も深く悲しんで—不幸な犠牲者に視線を投げかけた—そして、ゆっくりその翼を開きながら—天空へと消えた」—「あなたは誰ですか」乙女が悪魔に叫びかける。—「私はあなたが待っていた若者です」。タマラの目が失われていた天国を呼び覚ます。どうしても光の天使になりたかったのだ。しかし深い所で、タマラへの恋は肉体的であった。天の門は心清く謙遜な者にしか開かれていない。タマラの魂は天に

2 Ιδομενέως 2013: 512 ここでの「迂回路」はクレタ方言の απογύρισμα である。

上ったのだが、悪魔は再び地獄に落ちてしまった。

このような救済を得ようとする暗黒の巨人【Τιτάνα】の努力は、レールモントフの小説『現代の英雄』(1840)の中でより多く見られる。ロシア文学【φιλολογίας】で初となる心理描写的【ψυχολογικό】な小説である。主人公ペチョーリン【Печорин】は魂の弱い人物で、欺瞞の中で生き、社会を軽蔑し、続けて解放を望んでいるが、それが叶わないでいる。自分に近づく人全てに不幸をもたらすが、凍り付いた表面の下の奥底で心は燃え痛みを感じていた。

レールモントフはこの小説の中で自我を生き生きと描いただけでなく、ペチョーリンを描写しながら、強大なリアリズムをもって全ての環境を克明に表現することに成功した。

同時にレールモントフはコーカサスのチェルケスたちとも戦い、その戦いの内の一つ『ヴァレリク』【Βαλερικ】(1840)を絢爛に描いた。しかし、軍隊を除隊して詩作に自分の全てを捧げることが熱望した。しかし叶わなかった。或る士官との決闘に巻き込まれ、銃弾が彼の胸の奥へ入り込み、まだ人生の花の時期にあって詩人は死に伏した。この知らせはペテルブルクとモスクワの上流階級を安心させることとなった。彼らは、無慈悲な批評家とかいう危険人物から解放されたのだ。極めてわずかな人だけが、ロシアは再び偉大な詩人を失ったのだと感じた。

ニコライ・ゴーゴリ

真にロシア的で、詩と散文の二つの大道を初めに切り拓いたプーシキンの後で、また激しい情熱をもって大きく変革した浪漫主義的な魂の不安を歌い上げたレールモントフの後で、ゴーゴリはロシアの現実を非凡な幻視家であった【οραματικός】。

ゴーゴリの魂の拡張は悲劇的なものであった。かくも鋭く見据え、そしてかくも苦々しいユーモアをもって描写した現実の背後で、ゴーゴリはいつもより上位の、より深い現実を、そして一時的で馬鹿馬鹿しくはないようなものを探し求めていた。後に彼を支配しその命をも奪うことになった神秘主義は、突然の変節という訳でもなく、彼の生涯の必然的で不可避な結果であった。

ゴーゴリは狭量で、現状に満足した現実主義者ではなく、目に見える世界に収まることはなく、絶え間なく——風刺し、苦痛を感じ、笑いながら——より良い世界の中に避け所を探し続けた、神秘主義的で浪漫主義的な人物である。真の神秘主義者であった。より上位の世界の存在を信じ、それと交わっていたのだ。

それぞれの人物の主要な特徴を捉え滑稽な描写にまで持っていくゴーゴリの能力は、他の追隨を許さない。決して現実の単純な描写で満足することはない。そして、それを皮相的なものに変質させてしまうこともなかった。常に本質的な特徴を選び出す術を——ここではゴーゴリの才能の話であるが——知っており、このように滑稽な描写も深く真実であり、汎人類的なものであった。

ニコライ・ヴァシーリエヴィチ・ゴーゴリ【Νиколай Васильевич Гоголь】(1809-1852)は陽気で牧歌的なウクライナに生まれた。このウクライナに、滑稽で大胆な想像力としばしば重々しい偉

大なロシア人に欠けていたところのユーモアを負っている。ウクライナ人は踊りと軽やかで茶目っ気に溢れた歌、そして派手な色を愛しているのだから。

ゴーゴリの祖父の家は、ロシアの農民領主家に由来するものであった。常に食卓は整えられ、来る日も来る日も通りがかる通行人を誰彼問わず熱心にもてなしていた。このように幼いゴーゴリに様々な典型の人々を見聞きするきっかけが与えられ、彼の創造力を養ってくれた。

しかし、速やかに子供時代の忘れ難い生活は終わってしまった³。ゴーゴリはまだまだ幼かったのに、ペテルブルクに行って省庁の事務官に任じられることを余儀なくされてしまったのだ。この地位は極めて気詰まりで、彼は俳優になりたかったのだが、彼は追い払われ、それ以来物を書き始めることとなった。

処女作となる詩(1829)は『イタリア』【Италия】であり、ゲーテの『君はレモンの花咲く国を知っているか』【Kennst du das Land, wo die Zitronen blühen?】の模倣であった。最初の本は程よく間接的に農耕歌である『ガンツ・キュヘリガルテン』【Ганц Кюхельгартен】である。主人公の若きドイツ人は祖国と婚約を後に残し、浪漫主義的な旅に出た。アテネに行き、古代の廃墟に夢想を巡らしていたが苦痛を受けて失望し、婚約者ルーザの胸元に舞い戻って来た。公衆はこの処女作を冷淡に受容した。絶望したゴーゴリは書店から発行部を回収して火を付けた。

当時ウクライナの話を書いてみようという考えが浮かんだ。凍てついたペテルブルクで絶望と空腹の内に過ごしていたが、ゴーゴリは喜ばしげで穏やかなウクライナの風景を演劇化した。

空想とユーモアを、暖かい愛を、そして細やかな詩的色彩をもって遠くの故郷を描写した。しかし、まだこの作家の偉大なリアリズム的な才能が明らかになることはなかった。ウクライナの風景とそこの人々が牧歌的な浪漫主義でもって描き出され理想化された。女性たちは変わることなく陽気で、大地と川は物の怪と妖精に満たされ、その様式は疑浪漫主義的であった。

ゴーゴリの友人たちは彼を女学校の教師にさせることに成功した。キエフ大学の教授になる野心があり、十巻にも及ぶ模範となるべき中世史執筆を計画していた。しかし、速やかに失望することとなり、全生涯を文学的【φιλολογική】創作に捧げようと決心した。

様々な歴史研究の中で、ゴーゴリの発展を特徴づける三つの短編も含まれている『アラベスキ』【Арабески】を出版した。『肖像画』【Портрет】においてはまだ著しくホフマン——不確実な冒険を愛する浪漫主義者——の影響下にあった。『ネフスキー大通り』【Невский проспект】においてホフマンの影響は小さくなったが、依然として夢と現実の錯乱状態にあった。ここで私たちは既に、半分は空想だが、ペテルブルクの「ネフスキー」通りの素晴らしい描写を見出す。もはやゴーゴリの悪魔【δαιμόνο】が解き放たれ始めたのだ。最後に三つ目の短編である『狂人日記』【Записки сумасшедшего】において、同じ時期に書かれた『外套』【Шинель】と同様に、ゴーゴリは既に笑い話を描く偉大な才能を示していた。

かくも豊かな特徴とユーモアをもって、そして同時に極めて深い一貫性と辛辣さをもって小役

3 Iδομενέως 2006: 512 ここでの「終わってしまった」はクレタ方言の τέλεψε である。

人たちの卑しく、虐げられ、取るに足りない生が初めて、ロシア文学【φιλολογία】の中で命を与えられたのだった。彼らの魂がどのように震え、どのように機械の如く扱われ死んでいくのか、彼らの願望がどれほど滑稽で言葉にする程の価値も無いもので——そして同時に人の共感を得にくいものなのか！ これら卑しき生を過ごす罪深き者たちは、何か気高く困難なものを切望しながら地獄から抜け出そうとしていた。アカーキー・アカーキエヴィチ【Акакий Акакиевич】は外套をどうしても手に入れたく、『狂人日記』の主人公ポプリシン【Поприщин】は首長閣下の娘が欲しくてたまらなかった。劇場に行って新聞を読み、政治や哲学に関する思想を持った。彼は見ていられないような喜劇的であると同時に心を動かすような人物であり、私たちは涙を流す——というのも、この全てのばかばかしさとこの全ての欲求には一つの目的しかないように思われるからだ。つまり、窒息する魂が息を吸うこと、そして哀れな現実の生から逃げ出す翼を与えることである。

憧れの女性が貴族の宮廷人と婚約したことを知った時、哀れなポプリシンは『狂人日記』にこう書いた！「ばかばかしい！ 結婚式なぞ上げさせてはならない！ 貴族だなどと言えようものか。高貴なのは称号で、そんなものはあなたの手で掴むことのできない、目に見えない何かにすぎないではないか。貴族の誰も額に三つ目の目を持つ者も金の鼻を持つ者もなく、私のものと瓜二つであり、鼻だって全ての人の鼻と同じじゃないか」。ポプリシンは少しずつ理知を失っていき、自分がスペインの王だと思うようになり、人々は彼を精神病院へと送った。

アカーキー・アカーキエヴィチは最終的に飢餓と不眠の後、皆から羨まれる様な外套を手に入れた。友人たちがこの偉大な出来事を祝うため彼を食事に招いた。そしてその晩、外套が盗まれた。アカーキー・アカーキエヴィチはもはや生きようとは思わなかった。酒に溺れ、生きる目的を失ったのだった。

『アラベスキ』のすぐ後でゴーゴリは更にウクライナ短編を四作刊行した。『タラス・ブーリバ』【Тарас Бульба】は力強さと豊かな色彩、そして英雄的叙事詩の息遣いをもって昔のコサックの生を呼び戻した。『昔気質の地主夫妻』【Старосветские помещики】と『イヴァン・イヴァノヴィチとイヴァン・ニキフォロヴィチが喧嘩した話』【Повесть о том, как поссорился Иван Иванович с Иваном Никифоровичем】にはもはや牧歌的な陽気さはない。辛辣さと風刺に満ちている。卑しく余りに取るに足らない主人公たちに生において、ゴーゴリは永遠の人間性、つまり、滑稽な主人公と私たちを同一化させ、私たちを彼らと「兄弟」にさせるポイントを見出すことに成功したのだった。兄弟だと認めること——見よ、ゴーゴリの最上の作品において、私たちを感動させ、一見したところ私たちとはかくも異なる人間に私達を感情移入させる神秘である。

ゴーゴリは同時に、ロシアの生を舞台に上げようという野心をもって劇作品を執筆しようと試みた。有名な喜劇『検察官』【Ревизор】を書き(1834-5)、皇帝の仲介によってペテルブルクでの上演に成功した。皇帝自身が多大な関心を抱いて初上演に出席し、喝采を送っていた。終いには「私たち皆を片付けたが、何よりも先に私を」と言ったとされている。

風刺は猛烈であると同時に極めて正確だったので、多くの人々が自分自身をこの作品の主人公

だと思い、ゴーゴリに対して攻撃し、裏切り者でロシアの敵だと言い始め、即座にシベリアへの追放を求めた。

喜劇の主人公「フレスタコフ」【Хлестаков】はペテルブルクの皮相的なめかし屋であり、休暇で自分の村に帰っていた。宿に泊まったが金がなく、十日間無銭宿泊をした。しかしながら、小さい町の役人たちはペテルブルクから検察官が勤務監査にやってくるという知らせを受ける。この情報を宿の若い客の存在と結び付けてしまい、この若者が監察官であるとして振舞ってしまい、彼の方でも故意に彼らのことをより正確に抜き打ちしてやろうとした。この誤解がゴーゴリに言葉に表しようもない喜劇性をもった失墜、不名誉、ロシアの官僚主義の馬鹿馬鹿しさを示す契機を与えた。下級から上級の官吏まで皆賄賂を受け、至る所で不正行為と奴隷状態、そして横暴が蔓延っていたのだった。

ゴーゴリは更に二つの喜劇を書いた。『結婚』【Свадьба】という二幕劇と一幕劇の『賭博師』【Игроки】である。『結婚』で初めて新しい階級——古くて保守的な習慣としきたりへの愛着を有した、中産階級——が登場した。

しかし『検察官』が生み出した蜂起は続いて起こっていた。現実の検察官さえもが彼の処罰を求めた。ゴーゴリは外部に逃げ出し、そこで自身の大作を静かに完成させることを望んだ——『死せる魂』【Мёртвые души】である。

外国で過ごした全ての年月(1836-48)、ゴーゴリは完全に『死せる魂』に没頭していた。ロシアにおいても、そして全世界の文学【φιλολογία】においても、人間への風刺は決してここまでの鋭さには到達したことはなかった。

十九世紀初頭、農奴の「魂」【ψυχές】を有していた人々に対し、地主たちは人頭税を払っていた。税の払われた農奴が記載された名簿は十年ごとに改訂された。しかし、この十年の間に死んだ農民は生きていた者としてみなされ、地主は続けてこの農民のために税を払わねばならなかった。ところで、『死せる魂』の主人公チチコフ【Чичиков】は悪魔的な計画を立てた。土地所有者から馬鹿げた金額で——このようにして彼らを税金の支払い義務から逃れさせてやったのだが——全ての「死せる魂」を、つまり、もう死んでしまっている農奴を購入して、生きていた者として彼らを農民銀行に抵当に入れ、代わりに金を得たのであった。

チチコフは街から街へと旅し、多くの土地所有者を尋ね、ゴーゴリはこのようにして様々な恐ろしい典型——搾取し、破廉恥で浅はかな、そして良心の無い者たち——とともに田舎の生を描写する契機を見出したのだった。チチコフは——これもまた更に辛辣な風刺を行うのだが——犯罪的で珍しい典型をではなく、愉快的な典型を表象している。立ち振る舞いをわきまえており、どの人にも調子の合うことを言い、自分の企てには何の瑕疵もないことを強調する。彼の夢は極めて単純で純真である。少しのお金を集め、家を一軒買って自分の妻と静かに生活できるようにして、きちんとした子供に養育することである。残りの主人公たちもチチコフのようである——ただもう少しの陰険さがないだけである。何も特徴もなく、良かろうと悪かろうと、何の偉大な理想にも導かれず、いかなる不安も彼らの魂を揺さぶることがない。心理的無感動の泥

潭に沈み込み、愛することも憎悪することもなく、忍耐することも生きることもない——「死せる魂」なのだ。

「神よ、私たちのロシアは何と惨めことでしょう！」プーシキンは『死せる魂』を読んで大声で叫んだ。ゴーゴリは不安を覚え、「聖なるロシア」のかくも恐るべき顔を示してしまったので、心が感動に揺さぶられ始めた。今や作品を完成させるために闘っていた。ロシアにはただこのような『死せる魂』しかいないのではなく、善良で生に満ちた者たちもいて、そしてこれからもより良い者が生まれてくるのだということを示したかったのだ。完全無欠の「人間叙事詩」を編み、この作品の第二部『目覚めた魂』を、そして第三部で『覚醒した魂』を物にするという野心を抱いていた。第一部、地獄を書いた。今や魂は深い暗闇からかすかな生の煉獄の光へと、そしてそこから神の澄み切った光へと上らねばならないのだ。

ゴーゴリは絶望の中、自分の作品を完成させ、人々に偉大な徳をもって人々を、優れた女性主人公を、あらゆる犠牲と高貴さ、そして聖なるロシアの富を書き表すため戦っていた。しかし、叶わなかった。ゴーゴリの創造力にも限界があった。現実の描写においては、カリカチュアに至るまで深く偉大な才能を有していたが、気高い理想の典型を生み出すことは出来なかったのだ。第二部を書きを書いたが、消しに消すこととなった。彼の不安は大きなものだった。自身の倫理の未完成の故に失敗したのだ。彼は無垢ではなく、品行方正など信じておらず、神の下での天分を放ったらかしにし、この故にこそ作品の中でより上位な倫理的な典型を生み出すことができなかったのだ。ここに至るまで書いたものを後悔し、「真の『検察官』は永遠の裁判官であり、偽りの検察官フレスタコフは人を欺くような人間の軽い良心なのであり、官吏たちは悪い存在で私たちの情熱は……」のように、自分が書いたものを弁解しようと欲しながら、これまでに創造したそれぞれの主人公に象徴的な意味を与えようと努力した。

彼は先に進んで『死せる魂』を完成させることができず、中断させてしまった。『友人たちとの往復書簡からの選集』【Выбранные места из переписки с друзьями】を集めて発表した。ゴーゴリの魂が取った悲劇的展開が目に見えていた。私たちが救済されるためには、彼が述べて曰く、東方正教会の命令に従わねばならない。西方から来た各々の思想は魔鬼【Σατανά】が手を貸したもの【συνέργεια】であり、各々の新しさは罪である。私たちに詩作と傲慢に導く。ただ正教と絶対君主制だけが我々を救うのだ。農奴制は神の意志であり、神の恩寵で主と奴隷は真のキリスト者となりうるのだ。

ロシアの教養層にこの蒙い本が与えた印象は驚くべきもので極めて痛ましいものであった。若者たちは激しく怒り、ゴーゴリの信奉者であったベリンスキーは著者に当てて極めて攻撃的な手紙を書き、その中で彼を「クヌートと無知の使徒であり、暗闇の擁護者」と呼んだ。ゴーゴリは彼に返事を送らなかった。彼の理性は完全に転落死、宗教的精神病の中に失われてしまった。自分の本と手稿を全て集め、火をかけた。貧しい者たちに政府が彼に与えた年金を分けてしまい、彼は飢餓の内に死に瀕していた。彼は動き、エルサレムに祈禱に出かけ(1848)、更に精神を動転させてロシアに戻って来た。四年もの間、手稿の詰まった袋を一つ肩に架けて、乞食のように

街から街へ、そして家から家へと巡った。

彼の同時代人で私たちにゴーゴリのイメージを教えてくれる者がいる。「彼は背が低く蟹股で、みすぼらしく、大きくて変な鼻と額の大きな巻き毛の持ち主であった」とトゥルゲーネフが言っているように、彼は狐のような見た目をしていた。

ゴーゴリはもはや書かなかった。主に『死せる魂』の完成したほとんど第二部だったのだが、残った手稿も焼いてしまった。聖餐の準備をしたいのだという口実で、食事の受け取りを拒否した。アレクセイ・トルストイ伯爵【Алексей К. Толстой】はモスクワの彼の家で逃げ場を与えてやった。無理にでも彼に食事を摂らせようと努めたが、ゴーゴリはもはや生きようとはしなかった。ある日、祈りと断食に疲れ果て聖像の前で死んでいるのが見つかった。

プーシキンが名付けたように「陽気な憂鬱病み」であり、ロシアの偉大な風刺家は、かくも深くすすり泣きと笑いを一つに結び付け、自分の主作品を完成させることなく死んでしまった。神秘主義者で、自分自身の内に閉じこもる疑り深い狂信者は、光に満ちてあらゆる精神的な息吹に開かれていた、平衡感覚に優れたプーシキンとは真逆の存在であった。

しかし、彼が先に残したものは、その時代では手つかずの物だった。「ゴーゴリの各々の作品は、ベリンスキー曰く、素朴で真実であり、その主題はよくあるもので筋書きも取るに足らず、日常の出来事である——しかし、これらはまさに偉大な創造者の特質である。現実の詩作であり、日常生活の詩作である。ゴーゴリは素朴でありふれた人を描いたが、この描写の中にあなたは人類のあらゆる過去と現在、そして未来を見出すだろう」

第9章

スラヴ派【Σλαβόφιλοι / Славянофильство】と西欧派【Δυτικόφιλοι / Западничество】

デカブリストの革命の失敗は、ロシアの知識人たちにその失敗の原因を深く解明するよう強いた。若い知識人たちは皆社会的政治的解放の手段を見出そうと闘っていた。

このように、自分の田舎から始め、貧しく、病弱な激情家で、教養と行動に飢え渴いて、モスクワやペテルブルクに行ってそこで同志と共に夜を明かすようなロシア人学生の、誰の口にも上るような典型が後に創造された。茶を飲んで煙草を燻らせ、どのようにすればロシアが、そして全人類【ὄλο το ανθρώπινο γένος】が救われるのかを議論していた。新しい信仰、新しい救済のスローガンを求めていた。「1830年代のイデオログたち」である。初期の思想的発露、殉者、英雄、空想にふけるロシアの「インテリゲンツィア」である。後には、彼らの間で相争うことにはなるのだが、一致した思考が熟成されていた。スラヴ派、西欧派、正教徒、懐疑派、自由主義者、純粹美学者、唯物論者、イデオログ。

このような多産な勃興において、主要な集団が二つに別けられる。若きニコライ・ウラディーミロヴィチ・スタンケーヴィチ【Николай Владимирович Станкевич】(1813-40)を指導者に擁した哲学派、アレクサンドル・ゲルツェン【Александр Герцен】とオガリョフ【Огарёв】を指導者として擁した政治派である。

初期の人々はカントやフィヒテ、そして何よりもヘーゲルに、倫理的で政治的な生を保ち、それをロシアの受容にあてはめるべき「体系」、つまり基礎を見出そうと努めていた。しかし、ロシアの全人類的な使命に関する問が置かれた際には、哲学派の一団の識者たちはスラヴ派と西欧派に分かれた。前者の人々は、ロシアがヨーロッパとは異なる道の発展を辿っており、その形態と伝統、そして心理性【ψυχολογία】は大きく異なっているという主張を支持した。ロシアには世界の救済という固有の使命があり、スラヴ魂【σλαβικής ψυχής】の偉大な諸徳——謙遜さ、善、同胞感情——を追求し、伝統的な地域のソヴィエトに従って自分たちを管理せねばならない。大地は共同体に属さねばならず、そしてそれぞれの家庭が養った人数に応じて一定の年数分け合わねばならない。スラヴ派は、西方の文明を攻撃し、ロシア民衆【του ρωσικού λαού】の尋常の歩みと通常の成熟を中断させ農民【μουξίκο】を理想化してしまったピョートル大帝を憎悪していた。

「民衆たち【των λαών】の友好関係が、そして真理と善の有する意味が偽りの幻想ではなくて生命に溢れた永遠の力であるならば、未来における倫理的優越は、征服者としてのドイツ人ではなく、善なる農民としてのロシア人に属するのだ」とスラヴ派は喧伝する。

それに対し西欧派は、ロシアは避けがたくヨーロッパが既に通過した発展段階を負うことになるのだという主張を支持した。ロシアは、同時代の必要に適応させることができるようにただただ極めて迅速にこれを通過しなければならない。ピョートル大帝の救済事業は終了しておらず、

この故に我々は耐えねばならない。救済のスローガンは「聖なるロシアを遡る」のではなく、「ヨーロッパの前へ」である。旧来のロシアの社会的・経済的制度はもはや極めて時代遅れであった。神権政治は人類が通過した形態の一つであるにせよ、国家の工業化と市民階級の創造、そして文化的な市民による民主主義の地盤を準備しなければならない。

西欧派の頭には、チャアダーエフとゲルツェンであった。二人は同じ熱狂をもって自分たちの西欧派の思想を、ロシアの中世的な使命に対するスラヴ派の信念と統一しようとしていた。

ピョートル・ヤコヴレヴィチ・チャアダーエフ【Пётр Яковлевич Чаадаев】(1794-1856)は奇妙な人物で、情熱に満たされた、西欧派主義者とキリスト教徒の混合物であった。ナデジディンの『テレスコープ』で一作目となる哲学的書簡を創造した。発展の歩みの一步一步は必然的に前進の歩みであった。前進とは、ただ思想が展開される時にのみあるものである。故に、西方人【Δυτικοί】は先を進んでいるのだ。キリスト教的な思想を基礎にしつつこの地における神の統治をもたらそうと企てているからだ。中国人たちは停滞の内にとどまっているが、それは自分たちの歴史的思想における展開がもはや成立していないからである。ロシアは何の道も、思想も、目的もなく東方と西方の間にある。「私たちに何ら固有の内的発展はない。大きくはなっているが、成熟していないのだ！」過去も現在も持たないロシアの唯一の救済は、ヨーロッパが通過したのと同じ道を辿りながら、初めからロシアの形成を始めることだ。道は一つしかない。完全なる欧州化。思想は一つしかない。ローマ・カトリック教会だ。ロシアがこの道を辿らない限り、ロシアは、全世界文明に対するロシアの貢献は極小のものになることだろう——アビシニアが成した貢献のように。しかし、ロシアが極めて迅速にヨーロッパ的發展段階を通過することは可能であり、ヨーロッパが犯した誤りを避けるだけでなく、ヨーロッパ文明を脅かしているあらゆる社会問題を解決することも可能である。「私は、他の者たちよりも遅れてやって来たが、それは他の者たちが失敗した所を成功するためである」

情熱的な西欧派主義者は、このように狂信的なスラヴ派に対峙した。両者ともロシアのメシア的な使命を信じていた。同じく揺るぎのない確信がゲルツェンにも閃きを与えていた。しかし彼においては、宗教が何の役割を果たすこともなかった。ただ西方文明がロシアに与えた手段でもってロシアが世界を救うのだと信じていた。

アレクサンドル・イヴァノヴィチ・ゲルツェン【Александр Иванович Герцен】(1812-70)は豊かな地主の息子で、大切に養育された。しかし、デカブリストの「恐ろしい顛末が子供の眠りの時から彼の魂を揺さぶっていた」

モスクワで学生をしていた時には、無目的な哲学的理論に関心を抱いてはいなかった。活動の実践的な法則を見出そうとし、ヘーゲル哲学をもた「革命の代数学」とみなしていたのだった。熱狂的な社会改革者サン・シモンを研究し、活動を渴望していた若者たちの集団を自身の周囲で組織した。「若者たちが我々の門を叩き、私たちの心は大きく開かれた」

ゲルツェンは様々な地方都市で官吏に任命されたが、すぐに職を辞してモスクワに定住し(1842-47),そこでベリンスキーと共に急進的な西欧派の主導者になった。物を書き始めた。小説『誰の罪か?』【Кто виноват?】は芸術的価値の故にではなく、彼が開示したイデオロギーの故に興味深いものであった。主人公ベリトフ【Бельтов】は聡明で教養のある人物だったが、意志を欠いた夢想者であった。あらゆることを試して至る所で失敗し、世間を徘徊してロシアに戻った。そこで、彼のことを愛してくれる若い女性と知り合うのだった。この恋が彼を破滅させた。彼女は自分の心正しい夫を諦めることが出来ず、もはやベリトフの方にも彼女を略奪する力も、彼女を諦めて立ち去る力もなかった。このように彼らは三人とも不幸になってしまった。誰のせいなのか。誰も自我を犠牲にすることができなかったのだから、三人共のせいである。

ゲルツェンは永久にロシアを離れることになった(1847)。その文明に大いに驚嘆したヨーロッパに逃げ込んだのだった。しかし、ベルリン、パリ、ロンドンでは大きな失望が待ち受けていた。フランス革命の偉大な理想が現実化した様を見ることができると期待していたが、それに対して目にしたのは、「至る所で乾物屋が支配していた。あらゆる物に対し自分の刻印を押していた」。市民たちは自分たちの持ち物から何も与えようとはせず、プロレタリアは彼らから全てを奪おうと欲していた。上級のイデオロギーなどは何一つとして存在しない。さて、まだ市民を持たないロシアは、こんな道を歩まねばならないのか。

ゲルツェンはロンドンに定住し、偉大で極めて多産な活動を開始した。『鐘』【Колокол】(1857-63)という自身の雑誌で、全ロシアに対し急進的な思想を普及させていた。文体は生気に溢れ、力と色彩に満ち、ロシアの最も輝かしいジャーナリストの一人だと言えよう。その生涯は闘争と理想への執着、彼の民族【φυλής】の将来への確信で満たされていた。ゲルツェンの回顧録『過去と回想』【Былое и думы】全体が情熱的に彼のイデオロギーと激動の時代を反映している。

しかし精神的に優れた人物として偉大な批評家のベリンスキーがいた。ヴィッサリオン・ベリンスキー【Виссарион Белинский】(1811-48)は貧しい医者の子で、フィンランドのある村に生まれた。未だモスクワで学生だった時に『ドミトリー・カリーニン』【Дмитрий Калинин】という戯曲を書き、その中で辛辣に農奴制に対する攻撃を行った。直ちに大学から追われることになり、イデオログ集団に混ざった。パンを得るために、ポール・ド・コク【Paul de Kock】の物などフランス語の小説を翻訳した。最終的にナデジディンの『テレスコープ』の戦略的な協働者になり、有名な『文学的【φιλολογικά】夢想』【Литературные мечтания】を刊行し始めた——ロシア文学【φιλολογίας】の発展のための批評であった。

ベリンスキーは、ロシアはまだ民族の特性というべきものを有していないのだから、まだ民族文学【εθνική φιλολογία】も有してはいない、という主張を支持した。ピョートル大帝は不断の刷新によって民衆【λαού】と教養層の間に無限の深淵を開いてしまった。民衆【λαός】は未開【βαρβαρότητα】の内に留まり、教養層はロシアの地【χώμα】から根を失い、外国の文化を猿真似している。自分たちの真のロシア「共同体」【κοινωνία】を獲得した時にのみ、自分たち

の真の文学【φιλολογία】を獲得することになるだろう。全てがそのようになるまで、私たちの義務は一つである。教養を積もう。「自身の時が来た時に自分一人だけでやって来るような文学【φιλολογία】は願い下げだ。私たちに必要なのは涵養なのだから！」

民衆【λαοί】が子供時代や少年時代を過ごせば過ごすだけ、芸術家は実際の生に関心を抱き接近する。もはや世界の幻想的で英雄的な光景【όραμα】でもって生きるのではなく、もはや神々や英雄たちのために働くこともない。しかし、現実的で日々の個人にこそ、まさにその時代の問題にこそ関心を抱くのだ。私たちの生こそが芸術の有する唯一の価値ある主題というわけだ。生こそが問題であり、その解決を私たちは探している。同時代の生はもはや初期の世紀の素朴な生とは何の関係もない。今日の私たちの生は恐ろしい戦いであり、困窮と苦悩である。私たちの時代の抒情詩人は喜びに満たされているよりはむしろ苦痛を感じている。奇跡にぽかんと口を開けて見惚れ、神秘の力に服従するよりもむしろ探求し問う。レアリズム小説が現代の叙事詩なのだ。

ベリンスキーは文学者【λογοτέχνη】に余分な表現や修辭的修飾無しに現実を刻印するように、真実と自由のために闘うように、民衆【λαός】を啓蒙するようにと要求した。

ヘーゲルは「存在するものは理性的である」と言い広めた。しかしベリンスキーは、自身の周りに暴政、不正、欺瞞を見出し、速やかにこの哲学的忍従から解放された。もはや客観的平静やゲーテのオリンピア主義【ολυμπιότητα】ではなく、激しい情熱であり、シラーの自由主義的な勢いである。プーシキンでもない。文芸技芸の作品を組織的に喧伝せねばならず、倫理的活力であるべきで、実践への道を拓き、どこで、どのように、という問いに答えねばならない。

直ちに初めから、この社会的で美学的な喧伝に到達したわけではない。初めは、哲学的理論に夢中になって現実性への絶対の忠誠を喧伝していたのだった。ものが存在するとは、曰く、存在することが妥当であるということの意味している。彼に——「君主制やそれなら暴政、それに聖なる尋問もなのか」と尋ねるのなら、ためらうことなく「そうだ！」と答えたことだろう。

しかし少しずつ、ペテルブルクに定住し飢えに耐えるようになって、生きるために真夜中も働くようになった。制度と人間を身近に識って、イデオロギーを変更し始めた。「生きて考えれば考える程、私はますます暖かくロシアを愛するようになる。しかし今、私は現実が自分を絶望へと導く様を見ている。全てが悪臭を放ち、通俗的で不快、非人間的だ」

一年後、ベリンスキーはペテルブルクでの生活をこう言及している。「現実と和解しようとする努力なぞ呪われるがよい！ 人類を過信した高貴な大シラーよ、輝かしい救済の星、血塗られた伝統から社会を自由にする者よ、万歳！ 人間の個性は歴史や社会、そして人類全体に優先する！」

同時に彼の美学も変化した。技芸の作品において最も貴重なものは社会的方向付けとレアリズム的性格である。友人に「私の中で野生的で熱中した、熱狂的な人間の個性に対する自由と独立への愛が起こったのだ。今になって、私はようやくフランス革命を理解し、マーラーの血に飢えた自由への恋をも理解した。最上の理論が私を支配している。社会主義だ。私はますます国境のない世界市民になっている。私はマーラーのように人間を愛し始めている！」と書き送った(1841)

。このように、文芸技術は社会改革の道具である。それぞれの文学【φιλολογικό】作品においてベリンスキーは、何が社会革命に貢献しうるのかという主に一つの問題を探求していた。しかし、彼の美的感覚はあまりに偉大で、成熟への恋心は抑えがたい程であり、したがって不本意ながらしばしば社会学的イデオロギーを脇に置き、純粋な文芸技術の作品をも情熱をもって認めた。彼以降にプーシキンとゴーゴリの熱狂的な信奉者はいなかった。預言的な鋭さをもって1841年ごろに現れ始めた新しい才能——トウルゲーネフ、ゴンチャロフ、ドストエフスキー、アレクセイ・トルストイ等々——に対し、文学【φιλολογικό】における偉大な未来を予言しながら敬意を送ったのも、彼が最初である。

ベリンスキーの弱々しい気質は、ペテルブルクの沼地のど真ん中で極めて過酷なパンを稼ぐ闘いにも耐えられなかった。しかし、最後の瞬間まで疲れ知らずに働いていた。理性は継続して興奮の中にあっても前進していた。狭い実用的な便宜性から解放され、清い自由な目で文芸技術を見始めた。晩年の批評では、美的概念の最上たる第三段階に至っていた。たとえ社会学的思考の優越性を強調しながらも、どんな目的であれただのプロパガンダにすぎないような文芸技術の作品を迎え撃った。詩とは、述べ伝えて曰く、いかなるものであれ文芸技術の作品である。そうでないのなら、最も先進的な社会思想と深い哲学的思考に益する所は何もないだろう。ただ美だけが詩を作り出しそれを救うことが出来る。

しかしベリンスキーは、批評の新しい方向性を成熟させるまでには至らなかった。極度の貧乏の中、肺結核で死んだ。

この新しい純粋に美学的な方向性をアンネンコフとドルジーニンという二人の主な批評家が継承した。

パーヴェル・ヴァシーリエヴィチ・アンネンコフ【Павел Васильевич Анненков】(1813-87)はプーシキンとゴーゴリの伝記作家であるが、それぞれの社会学や哲学の趨勢からの文芸技術の自由を主張した。批評の目的は、文芸作品の中でどのような思想が支配しているのかを見出すのではなく、美を有する作品を創造してくれる、内的に神秘的な著述が何であるのかを見出すことである。詩人はその時代のイデオロギーから独立であるべきだが、彼の時代のあらゆる形態を有しておくべきである。

アレクサンドル・ヴァシーリエヴィチ・ドルジーニン【Александр Васильевич Дружинин】(1825-64)はアンネンコフ程理論家寄りではないが、激しく急進派の「独裁的な」批評を攻撃した。

急進派のことも美学者のことも一面的だとみなしていたが故に、これらと激しく独立していた批評家にスラヴ派のアポロン・アレクサンドロヴィチ・グリゴリエフ【Аполлон Александрович Григорьев】(1822-64)がいる。文芸技術は、曰く、単なる自然の模倣ではなく、生と深く結びついていたものである。詩人は、生を反射しただけで満足してはならず、自身の「最上の目的」から生

を批評する資格を有するものなのだ。このような批評は、無意識に、そして未完成のまま同じ生において描写される「理想」に基づいている。故にまさにこの理由で、必然的に各々の文芸技術は民族的な物【εθνική】に他ならないのだ。

批評の目的とは、文芸技術作品の基礎的な民族的【εθνικά】要素を明らかにすることである。プーシキン作品において初めてロシア魂はその完全な表現を見出した。プーシキンはバイロンのティタンという外国の典型から解放され、スラヴの素朴で清らかな性格を体現したのだ。グリゴリエフは自由な文芸技術の為に狂信的なスラヴ派の理想と自身の概念を一致させようと努力した。文芸技術は、彼が強調して言うには、自由な形態を生み出すものであって独立しており、各生命体と同じようにただそれ自体のためにそれ自体の生を生きるものではあるが、民族的【εθνικό】であって避けがたく組織的な内容を有するものであり、無目的な玩具ではないのだ。

第10章

ロシア・リアリズム

1. 短編と小説

スラヴ派と西欧派という知識人たちの大きな正反対の二集団は、あらゆる差異を越えて次の主要な二点に同意する。1.) ロシアは、伝統の道を辿ろうとヨーロッパ文明に夢中になろうと、世界の救済をその目的としている。2.) ロシアの現実に関する研究は、スラヴ派によっても西欧派によっても不可欠のもだとみなされている。

しかしその現実の研究、もちろんロシアの研究は、多くの悲惨と不正を暴き、批判を先鋭化して改善の必要性を呼び起した——そうして、専制的体制に耐え切れなくなった。故に検閲も警察も、自分たちが研究していた現実を敢えて忠実に表現するスラヴ派と西欧派の両者を野蛮にも迫害した。

ニコライ一世の暴政は、ロシア意識のあらゆる表出を圧迫した。クリミア戦争が勃発してロシアは敗北し、絶対主義に綻びが生じた。大衆でさえも【μεγάλες ακόμα μάζες】、唯一の結論としての絶対王政は終わったのだと感じていた。新帝アレクサンドル二世によって再び「自由の予感としての涼しい風」が吹き始めた。農奴制は撤廃されて(1861)、裁判所も改革され、地域自治も幾ばくか導入されて印刷と大学にある程度の自由が与えられた。文学的【φιλολογικές】・社会的集團は、もはや明確な政党へと化した。

しかし、失望に変わるのにそう時間はかからなかった。改良が重要ではなかったのだ。改革は皆が期待したような成果を实らせなかった。現実と同じものに留まり、もちろん、ある意味では更に悪化してしまった。文学【φιλολογία】は、リアリストのゴーゴリと批評家のベリンスキーが切り拓いた道を辿りながら、その全てを難しい業に捧げた。つまり、恐れと虚飾なく現実を刻印することである。1855年から主に1875年までリアリズムが全能の力をもって支配していた。ただロシア的な生だけが文学者【λογοτέχνες】に関心を抱かせ、風刺が勝ち誇り、皆が——作家、詩人、劇作家——同じ旗の下で戦った。保守派も自由主義者も同じ理想に高揚した。つまり、自分たちの作品に現代のロシア魂を反映することである。

ロシア社会の成熟は、アレクサンドル二世の王国の「自由主義時代」に大きなものであった。この時代はロシアの戦後と似ている——再び大きな希望が心に吹き付け、皆が自由と正義の契機の訪れに希望を抱いていた。

しかし、これらの時代には大きな差異が二つ存する。当時の教養層、つまり限られた少数者たちは動揺し、この動揺は今では拡大しきったものであるが、未だに民衆【λαός】の間ではそうではなく、前衛においてのみの話であった。そして当時のほとんどの知識人たちは貴族階級に属し、指導的イデオログは士官であったが、今や前衛がその構造を変化させた。今や先駆的な思想に

動揺している人々は、市民と貧しい知識人、そして司祭や小官吏の息子たちと商人である。

アレクサンドル二世の時代においてはもはや先進的な夢想者や哲学者はいなかった。そうではなく、実証的な【θετικοί】人間であった。抽象的な議論は、彼らには余分で危険な贅沢のように思われた。ただ民衆【λαός】を啓蒙して重荷を取り除いてやるものにしか価値を認めなかった。実践的な知と自然科学のみを解放にとって唯一の有効な武器と見なした。新しい福音である。ヘーゲルでもなくサン・シモンでもなく、ベンタムの英国功利主義とビューヒナー【Karl Georg Büchner】の唯物的世界観である。

あらゆる救済を科学に期待していた。これこそが神に取って代わるのだ。小規模経営の医者、迫害された学生、顧客の無い弁護士、ジャーナリスト、技師、腹を空かした知識人たちが集まって議論し、秘密結社を結成し激しいプロパガンダを行った。

最も平衡感覚のあり道理をわきまえた多くの知識人たちが、不信と皮肉を込めて情熱的で皮相的な、そしてしばしば行動的な若い「インテリゲンツィア」に向き合った。他の者たちは無関心であるか冷淡であった。

1. ゴンチャロフ。このような冷たく醒めた眼差しでこの熱気に満ちた時代に向かい合ったのは、シベリアの裕福な商人の息子であったイヴァン・アレクサンドロヴィチ・ゴンチャロフ【Иван Александрович Гончаров】(1812-91)である。モスクワ大学に学び、ペテルブルクで官吏に任命された。彼の生涯は穏やかで、規則的で、孤独であった。

彼の外的生の中で唯一の大事件はヨーロッパとアフリカ、そしてアジアを経て日本を旅したことである(1852)。当時彼が友人二人に送った手紙から書籍が生まれた。『戦艦パラダ』【Фрегат « Паллада »】は世界文学【φιλολογία】の中でも最良の旅行書の一つである。

ゴンチャロフは既に最初の小説『平凡物語』【Обыкновенная история】を書いていた(1847)。情熱的な若者アドゥーフ【Адуев】は頭の中に千二の浪漫主義的な計画をもってペテルブルクにやって来た。しかしすぐに満足して興奮が冷め、裕福な花嫁との結婚を準備し始めた。保守的な著者は、皮肉とユーモア、そして軽蔑的な微笑をもって無価値で独我的な、壮大な計画を有していた主人公の魂を露わにした。

ゴンチャロフは無感動に生を分析して描写した。ベリンスキーが特徴づけたように、彼は芸術家であり、それ以外の何物でもなかった。つまり、主人公たちを解剖したが、彼らに憎しみも愛も感じることはなく、社会や倫理の規範に関心を抱きもしなかった。「誤った者はこう言うだろう。私は混乱してはいない！」とでも言うかのようである。このように、全ての作家たちの内でゴンチャロフだけが絶対的な文芸技術の理想に近づいていたのだが、あらゆる他の作家たちは依然遠くにいた。それ故に成功もあったのだが。

十二年後ゴンチャロフは傑作『オブロモフ』【Обломов】を発表した。この小説は驚くべきものだった。ロシアの典型が成熟し無活力な夢に打ち勝ち、豊穡な行動の中に入ったのだと皆が喧伝していた一方で、ゴンチャロフは突然自分の作品に不治の怠惰と実践的に生に対して

無能者としてのロシア人を送り込んだのだった。著者の文芸技術が高く観察も正確で心理学的な手腕をも有していたが故に、あらゆる教養層とこれら急進派さえもが恐れをもって、オブローモフによって親類たちがどれほど「余計者」の完全な典型であったのかということを見ることになった。

夢想家で怠惰なオブローモフは、ソファーに寝そべて計画を練っていた。どのように自分の財産を使って農民を成功させてやり、そして全人類に救済の道を示そうかと。彼の血は沸き立ち、計画が理性を刺激する。彼はソファーの上で姿勢を変えたが、情熱は牙を抜かれたままで、もはや自分の勢いを維持することも――ソファーから飛び起きることもできなかった。しかし、すでに活動力は底をつき、また寝そべてしまった。時折少しだけ、オリガ【Ольга】への恋によって軌道の外に放り出されてしまう危険もあったが、またソファーに戻って快適な夜を過ごすのであった。

しかしオブローモフは、馬鹿でも平凡な人間でもなかった。彼の計画は極めて合理的であり、自分を益しようという欲求は誠実であった。極めて激しく強烈に、より上位の目的を持たない生を浪費している、自分の周りの社会を批判した。しかしその全才能は水泡に帰す。意志を持たず、力を持たないからだ。オブローモフは、果実のためには絶対に働くことのなかった、多くの領主世代の最後の白い果実であり、常に寄生虫であって農奴たちの労働によって生きていた。先祖たちの未開の【βάρβαρη】力をもはや有していなかった。その生の根っこは、その中で委縮してしまっただけだ。彼と彼の属するあらゆる階級は死を宣告されているのだ。

2. トウルゲーネフ。厳格で保守的なゴンチャロフとは異質な存在として、平衡感覚と牧歌的喜びで満たされていた、自由主義者トウルゲーネフがいた。

イヴァン・トウルゲーネフ【Иван Тургенев】(1818-83) はオリョールに生まれ、子供時代は嗣業地で何の喜びもなく過ごした。母は神経質で極めて厳格であり、独裁的で農奴たちを酷使し、幼いトウルゲーネフは忍従し、ひっそりと自分の全人生を奴隷にされた農民の解放に捧げようと誓ったのであった。

トウルゲーネフはペテルブルクに学び、後に有名な無政府主義者のバクーニン【Бакунин】を同学とし、ベルリンで哲学を学んだ。ロシアに戻って物を書き始めた。彼の処女作『パラシャ』【Параша】は、浪漫主義的で孤独な高揚をもって愛し合い、最後には最も平凡な結婚で終わることになる、肥え太って成功していく二人の若者の間接的な牧歌である。

ベリンスキーは「この詩が単なる若さの突沸なのではなく、この詩人が私たちに与えるあらゆる希望を実現してくれるように祈ろうではないか」と熱を込めて書いた。

トウルゲーネフはベリンスキーの希望を詩人としてではなく散文作家として達成した。トウルゲーネフの作品は穏やかで、細かな叙述と軽やかな皮肉、そして望郷の念に満たされていた。理性は若者たちと共にあったが、心には深い悲しみを抱いて素晴らしき過去の中を彷徨っていた。彼にはドストエフスキーのような混沌として悲痛な不安もなく、トルストイのような叙事詩的息

遣いもなかった。しかし、トゥルゲーネフの理性と心との闘いが収束する抒情詩的気質と平衡感覚が、彼よりも偉大な二人の人物には欠けているオリンポス的な穏やかさを与えたのであった。

トゥルゲーネフは熱狂的に狩りが好きだったが、狩りに向かう道中で多くの農民と知り合った。有名な『獵人日記』【Записки охотника】(1852)の中で温かな同情をもって農民の喜びと辛さを描写した——全く農民を理想化することはなかったが、偉大で豊かな思いやりや啓蒙され覚醒せねばならないという欲求を黙っていることも、どれほど生の状況が農民を暗闇に置かれて生き続けているかと呼び覚まそうとすることもやめはしなかった。トゥルゲーネフは、子供の時の誓いを忘れてはいなかった。この小さく極めて温かな本は、叫びと暴力に満たされていた他の作品よりも農奴たちの解放の一助となった。

権力を持つ者たちに嫌われ、トゥルゲーネフは彼の地所に追放された。最終的には外に逃げ出すことに成功した(1855)。それ以来彼は、同時に自分の地所を見、そして狩りをするために数か月はロシアに帰りもしたが、全生涯をもはやヨーロッパで、何よりもパリで過ごすことになった。有名な歌手のポーリーヌ・ヴィアルドー＝ガルシア【Pauline Viardot-Garcia】と交友関係を持ち、彼女の夫がゴーゴリやプーシキンを翻訳するのを手助けし、全生涯に亘って彼女の家で暮らしたのだった。

最初の十年間(1855-65)でトゥルゲーネフは大作の小説を四つ発表した。この時には主に農民ではなく、自分自身の階級の典型を、つまり無目的に人生を浪費し活動への能力を持たず、無益で「余計者」であった土地所有貴族を描写した。『ルージン』【Рудин】で主人公はオブローモフのように、完全な計画を立て若い理想に燃える使命を持っていたが、根底では無関心で、何かを実現させる能力を持たなかった。

『貴族の巣』【Дворянское гнездо】において、トゥルゲーネフはもはや消えてしまった昔のロシアを、農奴や総主教の生を有する、暖かく外国人たちをもてなしてやり、浪漫主義的な興奮を有するロシアを描写した。心優しい著者は、憂鬱を含んだ望郷の念を込めて「聖なるロシア」が有する父祖伝来のよき伝統に別れを告げるのだった。

三つ目の小説『その前夜』【парамо́нї / Накануне】においては、ロシアはもはや解放されたものとして、純朴な子供時代からは遠ざかったものとして表象される。新しい生、夫たちが目覚め、貪欲に身を投じ、活動の中でうずうずしている。女主人公のエレーナ【Елена】は前作の純真な乙女リーザ・カリーチナ【Лиза Калигина】には似ても似つかなかった。彼女は活発で、覚悟を決めて父の家を手放し、戦いと危険を分かち合うために愛する夫の後を追う。そして夫が死んでも、彼女がその業を引き継いでいくのだった。

四つ目の小説『父と子』【Отцы и дети】では新旧世代の間の闘いが勃発する。主人公で「ニヒリスト」のバザーロフ【Базаров】は、古い世代の役割を否定する。「貴族性、自由主義的精神、進歩。何と外来で余計な言葉であろうか！ —お前は何を欲しているんだ？ —と人々は彼に問う。—何か新しい物でも持って来ようってのか？ —いえ、特に何も、と彼は答える。—我々はまず初めに現にあるものを消し去り、新しいものが来るための場所を作らねばならないのですよ。自

然はね、あなたたちが考えているような神殿ではなく作業場であり、人間の方も礼拝者ではなく作業員なんですよ。神などは存在しません。ただこの大地があるだけで、この大地は、活動的で実践的な人間に属しております」

このトゥルゲーネフの作品は皆から冷淡に受け入れられた。古い世代の人々は、バザーロフに対しロシアを破滅させることになる若い魔鬼的な精神の具象化を見ていた。若者たちは主人公を、積極的な計画もないのに皮肉を込めてくるような人物と見ていた。

トゥルゲーネフは落胆し、滅多に故郷に行かなくなり、後には『足れり』【Довольно】と『煙』【Дым】等のわずかな作品しか書かなかった。これらは、著者の悲しみと失望を明らかにしてくれる。『煙』においてロシアの反動者たちについて軽蔑をもって語るのだが、同じぐらいの悲嘆と軽蔑をもって空っぽな頭の若い革命家たちについても語った。

更に後の書簡小説『処女地』【Новь】において、トーンはそこまで悲痛ではないのだが、トゥルゲーネフは既にロシア的生との密接な接触を失い始めており、文芸技術の作品として見ると『処女地』の出来栄はよろしくない。しかしながら、これら『ファウスト』【Фауст】、『初恋』【Первая любовь】、『曠野のリア王』【Степной король Лир】等々の短編も、同じ喜びと穏やかさ、つまり同じ優れた芸術的形態をも失い続けていた。

時折トゥルゲーネフは、二人の相異なる主人公——ハムレットとドン・キホーテ——を比較する。一方は思慮深く、まさにそれ故に活動を欠く。他方は感性に富んでおり、故に無分別に飛びかかり滑稽なのである。これら不揃いな二人の主人公が、トゥルゲーネフの同じ魂の中にあって全作品の中で戦っている。トゥルゲーネフが創造する英雄は、最も危険な瞬間にあって何ら実りある成果なく引き下がってしまう——多すぎる思考が妨げられるからでもあり、理性が貢献した物事を反駁できない無思慮な本能が台無しにしてしまうからでもある。

しかし、これらのあらゆる登場人物【прόσωπα】は、抽象的な思考、つまりトゥルゲーネフの単なる創造的想像の産物ではない。それらはロシア的生から取られたものであり、常にどれほど現実に忠実であったのかを本人が強調している。「出発点として、現実の個人を抱くことなくどんな登場人物をも創造しようとは決してしなかった。自然が私に大いなる発案の才を贈ってくれることはなかった。私が確かにその身を支えることのできる狭き土壌【έδαφος】に、常に基づかねばならなかったのだ」

トゥルゲーネフは演劇も試みたが、成功を得はしなかった。彼は主に短編作家であり、その劇作品は演劇的に見て巧みな一貫性を欠いており、単なる対話による語りになっている。しかしながら、極めて詳細に青年と美しい女性の恋愛を描いた喜劇『村のひと月』【Месяц в деревне】は興味深い作品である。

最後の作品『散文詩』【Senilia / Стихотворения в прозе】は、トゥルゲーネフの穏やかな魂とあらゆる内的な闘いを後期に満ちた優美さの内に表現している。ロシア民衆【λαός】とロシア語、そして純真で善良な農民【μουζίκου】に対する愛、皮相的なイデオロギーへの皮肉、自然に対する純朴で深い思考、死後の混沌を前にした慄き。

特にロシア語におけるその役割は感動的である。「私の絶望の日々に、私の祖国の運命の不

安の日々に、ただお前だけが私に慰めであり支えであり、お前だけが偉大で力強く、生气に満ちた自由なロシア語よ！もしお前がいなかったのなら、この祖国が落ちぶれていくのを見ながら絶望せずにいられなかつたらうか。このような言語が、必ずや、偉大な民衆【λαός】を創造しえないということは決してありえない！」

トゥルゲーネフの晩年は苦痛に満ちていた。辛抱強く恐ろしい病の苦痛に耐えていた。癌で死んだ。死者はペテルブルクに移送されユニークな栄典をもって埋葬された。偉大で穏やかな芸術家であった。彼ほどに優美さと深く控えめな感情をもって自然と恋愛を描いたものはいなかった。トゥルゲーネフは、教条主義や社会学的プロパガンダを持たない明晰な文学者【λογοτέχνης】であり、今日に至るまで最も精神的に解放されたロシア人著述家である。

3. ミハイル・サルティコフ。トゥルゲーネフは心理【ψυχολογίας】の詳細な描写と穏やかな心の気質において偉大な人物であったが、サルティコフは、シチェドリフ【Щедрин】の偽名で有名な、ロシアの最も偉大な風刺家である。

ミハイル・サルティコフ【Михаил Салтыков】(1826-89)はツァールスコエ・セローの貴族学校に学び、学生であった時分より詩行を作り始めた。後には、自然言語を変質させて韻律にこれを隷従させるために自分の頭を悩ませるのは狂気の沙汰だと言って、これらの詩行を放棄した。

全身全霊を散文に捧げ、初めの短編を二作発表した(1847)。彼はただちに軍務省に有していた地位を解かれて、小さな地方都市ヴァトカに追放となった。早くも1856年にはペテルブルクへの帰還が許された。官吏として多くの地方を巡り、無数の典型と知り合って、完全にロシアで有名になっていた詩人のネクラソフと共に文学【φιλολογικόν】雑誌の運営に着手した(1868)。

サルティコフの初となる大作『県の記録』【Губернские очерки】には著者の長年に及ぶ官吏としての経験が含まれている。ゴーゴリの『検察官』時代から田舎の生の状況は全く改善されていなかった。こうして、サルティコフの作品においては、ゴーゴリによって知られるようになった、専制によって変えられてしまった者として、滑稽で、取るに足りない、慈悲深い人間の典型が再び私たちの前に飛び出して来るのを目にすることになる。

何頁にも及ぶ作品『無垢の物語』【Невинные рассказы】(1863)、『ある町の歴史』【История одного города】(1870)、『ペテルブルクの田舎者の日記』【Дневник провинциала в Петербурге】(1873【1872】)、『ポンパドール夫妻たち』【Помпадурсы и помпадурши】等々があるが、これらは物語と小説、寓話と神話、そして真の風刺的傑作である。

傑出した風刺の才能をもってサルティコフはアレクサンドル二世の自由主義的改革後のロシア社会の困惑と混乱を描いた。全社会階級が動揺していた。領主たちは旧来の習慣を失い、もはや農民たちに負担を押し付けて生きることは出来ず、自分の立ち位置を定めようと多くの滑稽な計画を立てた。若者たちの口は文学的【φιλολογικός】演説に満たされ、「新思想」を叫び、喉をからしたのだった。しかし彼らの内で何も変わることはなかった。解放された農奴たちの不幸は、彼らがどのように暮らしていけばよいのか知らなかつたため、絶望的だった。

サルティコフは容赦なく旧来の領主たちや血気盛んな偽革命家たち、そして新しい搾取者たちを風刺した。自由主義者たちが造った「新しい社会」はもはや領主たちの寄生虫で構成されているのではなく、「料理店主たち、暴利をむさぼる者たち、鉄道の請負業者たち、銀行家たちによって構成されていたのだ……。わずか数年でこれらの虱どもが街々と村々を埋め尽くした……。道々は大喜びで、売春宿を飾り立て、酒場の給仕は幸福感で震えあがる！」

サルティコフはこの「わずか五レプタ硬貨一枚の為に魂を悪魔に打った」新しい市民階級に激しい嫌悪をもって向き合った。専制は、魂を幾許か自由にしてくれたのだからまだましだと思われた。サルティコフはヨーロッパを旅したが、魂を欠いた太った、満足しきった市民しか見なかった。彼にとってフランスは「共和主義者【δημοκράτες】を欠いた共和制であり、満腹した市民と服を脱いだ女、そして有り余った食料と装飾、余りに凝った大広間でいっばいだが、そこでは昼も夜も姦通への賛美が垂れ流されている。もちろんこれら全ては強盗たち（ナポレオン一世）が支配していたときにも存在していたが、今何が必要なのだろうか。しかし二つのほどほどのものと一つの小さな大革命が起こったにもかかわらず、まだ不死なるものが生きている！」

サルティコフの最も暗く風刺的で絶望した作品は『ゴロヴリョフ家の人々』【Господа Головлёвы】であり、経済的な原因によってではなく、内的で不治の転落による、ある貴族家庭の凋落が描かれる。最後の子孫であるポルフィーリー【Порфирий】の代に至るまで、どの世代も怠惰で能力もない酔っ払いであった。両親は絶えず中傷しあいながら四十年間一緒に暮らした。夫は妻にいつも「鬼婆あ」と言い、これに対して妻はいつも彼を「風車」や「弦の無いバラライカ」と呼んでいた。息子はこのような環境に心を痛めて、嘘つきでおべっか使い、そして大酒のみになってしまった。

サルティコフは風刺的辛辣さに加えて、ロシアへの激しい愛と人間の改良への信仰を常に保持していた。しかし、アレクサンドル一世の脅迫が増大していったが故に、絶望して疲れ果て、もはや寓話や小説で表現することもできなくなりはじめた。晩年には三十一に及ぶ小説を書き、ここでは極めて多くのものを、ただロシアの欠陥だけではなく、一般的な、人間の無能力を風刺した。

ある小説の中で私たちは、全ての人に呪われて狩り立てられている狼を見ることになる。自然が狼を肉食にしたのだとして、この狼に何の落ち度があるのだろうか。他の所でサルティコフは、人々の仕事の邪魔をしてしまい、失敗して皆から——警察、小売商、技師、役人等々——追い払われたが、ある小さな子供の心に逃げ場を見出した不幸な良心の悲痛な旅【οδύσσεια】を詳細に物語った。

サルティコフは、ロシアで最も偉大な風刺家であった。彼の風刺は決して個人に向かうことはなかった。常に個人を越えてよりよい批評になるように導いていた。彼の皮肉と風刺の背後に、私たちは常に国を愛し、公平で感受性の強い偉大な人物のすすり泣きを見抜くことになる。

ゴンチャロフ、トゥルゲーネフ、サルティコフという偉大な三人の著述家に並んでチェルヌィシェフスキー、ドブロリューボフ、ピーサレフという三人の批評家が自分なりにロシア文学

【φιλολογία】に確定的でリアリズム的傾向を与えようと従事しようと努めた。

ニコライ・ガヴリーロヴィチ・チェルヌィシェフスキー【Николай Гаврилович Чернышевский】(1828-89)はサラトフに生まれ、とても教養のある聖職者の息子であり、ペテルブルクに学んだ。批評の処女作品は『ロシア文学におけるゴーゴリの時代についての研究』【Очерки гоголевского периода русской литературы】と『レッシング：彼の時代、人生、活動』【Лессинг. Его время, его жизнь и деятельность】であり、極めて大きな印象を与えた。後に経済・社会学的な研究にまで発展した。

突然彼は逮捕され(1862)、牢屋に放り込まれた。そこで二年を過ごした。牢屋の中で有名な小説『何をなすべきか』【Что делать?】を書き、これは若者たちへの福音となった。この作品の中では、天国とのあらゆる繋がり——宗教、倫理、美学——を投げ打つ「ニヒリスト」という新しく生み出された典型が描かれて称賛され、原則的に識りうる最上のものはその自我のみである。同時に、「理想」の殉教者となって自我を最上の痙攣にまで拡張し、犠牲の必要性を喧伝したのだった。

チェルヌィシェフスキーはシベリアでの強制労働に送られた。七年間鉱山で労働者として働いた。最終的には解放されたが、シベリアの小さな村を居住地として課された。1883年にはすぐにヨーロッパ・ロシアに戻る許可が与えられ、アストラハンで六年間を無為に過ごした。最後には生まれ故郷のサラトフで死んだ。

美学的批評家として、チェルヌィシェフスキーは熱狂的な功利主義の信奉者であった。現実を表象することが文芸技術の目的ではあったが、それは現実を超克するためではなく、単純に私たちに現実を思い出させるためのものであった。「彫像は決して生きている人間よりも美しくはありえない。なぜなら、対象の模倣は模倣された対象よりも美しくあることが出来ないからである」

チェルヌィシェフスキーによれば、文芸技術は私たちが生に、つまり「民族的生」【εθνική ζωή】に関心を持つ助けとなるものである。ピョートル大帝の考えでは、ロシア人はただ愛国者になるのがよく、つまりロシアの民衆の啓蒙という偉業に協働すべきなのである。もし賢い人間であれば科学が、芸術家であれば技芸が、法学者であればやはり法への関心が、つまり全てがこの最上の目的——民衆の覚醒——に服属させられるべきなのだ。

同じ思想を支持した人に、チェルヌィシェフスキーの後継者で貧しい司祭の息子であったニコライ・アレクサンドロヴィチ・ドブロリュボフ【Николай Александрович Добролюбов】(1836-61)もいた。ニージニー・ノヴゴロドに生まれ、言い表すことのできない程の貧しさの中を学生として生きていた。真夜中に本の上に身を屈め、学習と大衆の啓蒙を渴望していた——血気盛んで禁欲的だったのだ。ある日、舞踏を学びたいという誘惑が生じた。直ちに悔いて日記にこう書き記した。「このことは、私が社会と和解したがつていることを意味しているのだ。だが、この欲求から逃れたい。もし私が何も想像したくないと思うのなら、社会から遠く離れて生き、荒れ地に私の癩癩を養わねばならないのだろうか」

ドブリューボフによれば、美学的な批評は「感受性豊かで若い貴婦人が時間を潰すのにはいいのではないか」。しかし、真実の批評の目的は、現実のどの現象がその作品を創造するために芸術家を狩り立てていたのかを突き止めることである。文芸技術の作品は、単純な観察者の目では見出すことのできない現実の側面を私たちに明らかにしてくれるが故に価値があるのだ。このように文芸技術の作品は、私たちがより豊かで深く、自分たちの周囲の生を見る手助けをし、私たちに実践への道を拓いてくれる。技芸の目的はただ一つ、プロパガンダである。つまり人間解放の宣教を意味するのだ。

この功利主義的な批評革命層を更に妥協無く代表する人物に、ドミトリー・イヴァノヴィチ・ピーサレフ【Дмитрий Иванович Писарев】(1841-68)がいる。極めて若くしてゲルツェンに対する批評を書き、秘密印刷所で印刷した。しかし、警察は彼を捕らえペトロパヴロフスク要塞に送り込んだ。そこに四年間留められ、極めて重要な批評作品を書いた。釈放後も二年間生きたが、責め苦のような生活【μαρτυρία】と牢獄の苦痛に疲れ果て、若くして死んでしまった。

ピーサレフは熱狂的なリアリストであった。「愛を持って作品を完成させる懷疑主義的な労働者こそがリアリストである」。この仕事は功利的であるべきだ。つまり、単に限られた文章上の【λογικό】目的を持つだけではなく、その目的は達成されるべきだ。芸術家は文学作品【φιλολογικά】でもっては功利主義者たり得えぬが故に、ピーサレフは文学【φιλολογία】が失墜したことを喜び、「ロシアの未来の精神的兆候にとっては良い兆候だ」とでも大声を上げて書くことだろう。

美学とは、各々の真実な発展にとって極めて危険な敵である。詩行を読む者或いは絵画を鑑賞する者は、自分の力を失い、社会的義務をおざなりにする危険性がある。リアリストでない者は詩人ではなく、むしろ単なる天賦の才をもった文豪であるか気狂いであり、或いはちっぽけな「虚栄心の強い虫」である。レールモントフ、ゴーゴリ、グリボエードフ等は単なる「詩人の萌芽」に過ぎない。ジュコフスキーとプーシキンが詩人の「パロディー」である。役に立たない余暇の内にかくも多くの力を失ったのだという理由で、ハイネとレンブラント、そしてモーツァルトを非難したのだった。

批評の功利主義的精神に基づき、いくつもの作品が書かれた。多くの模倣者を見出した最も重要な作品に、チェルヌィシェフスキーの小説『何をなすべきか』がある。この作品では、ロシアと世界を救うであろう「若い夫たち」と「若い妻たち」が表象されている。皆が中産階級から出た者であり、民衆の啓蒙に身を捧げている。理想のために全てを捧げるラフメトフ【Рахметов】という貴族もいる。労働者としてロシア全土を走り回り、最終的には厳格な禁欲的生活に落ち着くことになる。葡萄酒を飲まず、女性に触れることもない。自分がやりすぎなのだと悟らせられた時、こう答えた。「こうあるべきなのだ。私たち人間は皆、殊に自分の人生を享受することができるように生きている。ところで、個人的な感情を満足させるために闘っているのではなく、

全人類の善のために闘っているのだということを自分の生涯をもって示すことは正しいことだ」

チェルヌィシェフスキーの小説の最も重要な後継者に、貴族のヴァシーリー・アレクセエヴィチ・スレプツォフ【Василий Алексеевич Слепцов】(1836-78) と貧しいプロレタリアのニコライ・ヴァシーリエヴィチ・ウスペンスキー【Николай Васильевич Успенский】(1837-89) がいる⁴。二人とも自分たちの物語の中で生々しい現実をもって農民【μουζικούς】を描写した——彼らの未開さ【βαρβαρότητες】や醜さ、愚かさをもって。内容の濃く生き生きとした農民の言語で書かれた対話篇は格別である。

この時代の興味深い人物としてはパーヴェル・イヴァノヴィチ・ヤクーシキン【Павел Иванович Якушкин】(1820【1822】-72) が傑出している。貴族の家系に属してはいるが、小さい時から「風紀」ある社会というものを憎み、民衆【λαός】に献身していた。学生として民衆歌【λαϊκά τραγούδια】を集めるためにヴォルガを歩き回り、あまりにも放浪の生を好んでいたため、その死に至るまでこれを放棄することはなかった。村から村へと行き民衆【λαός】と共に生き、言語の躍動性と豊かさで有名な農民の小作品を書いた。ヤクーシキンは貧しくも聖なる人生を生き、サマラの病院で孤独に死んだ。

独創的な物語作家のフョードル・ミハイロヴィチ・レシェートニコフ【Фёдор Михайлович Решетников】(1841-71) とニコライ・ゲラシモヴィチ・ポミャロフスキー【Николай Герасимович Помяловский】(1835-63) は二人とも熱狂的なリアリストであり、二人とも聖職者の息子であり、放浪者で酒飲みであった。

レシェートニコフの物語『ポドリプノエ村の人々』【Подиповцы】は農民的生の恐ろしいイメージを与えてくれる。彼らの中で最も賢い部類の人々は、たった五本指で数え入れるぐらいのものである。人々が生きている貧しさ、臭さ、惨めさというものは、哀れな動物よりも恐ろしい。藁と木の皮で作ったパンを食べ、一年に一度シャツを着替える。文化というものから識⁴っている唯一のものは、酒である。著者は文学的【λογοτεχνική】な加工や詩的処理、そして風刺を施すことなくこの恐怖を描写したのだ。ただ見て、そして目にする物を書いたのだ。この本は、身の毛もよだつ印象を与える。同様に全ての作品において、レシェートニコフは粗野で愚かな、飢えた中産階級と農民を描写した。

ポミャロフスキーの主要作品『神学校の記録』【Очерки бурсы】は、学生だった時の自伝である。教師と生徒たちの未開さ【βαρβαρότητας】と通俗さの恐ろしい描写である。非人間的な罰、残忍な教育的システム、飲めや食えや【όργια】。

ポミャロフスキーは『小市民の幸福』【Мещанское счастье】や『モロトフ』【Молотов / Μολαταύτα】等の全作品において、より上位の社会階層に上ろうと闘っているが、そこに愛想を尽かし何の理想も持たない下層階級を見出しながら耐えている、精神的プロレタリアを継続して

4 原文では「(1737-89)」と年代の誤植があり、本翻訳で修正を加えた。

描いた。ポミャロフスキーは、このような中産階級の幸福を軽蔑し、飲んだくれや物乞い、そしてスリとして全生涯を夜の逃れ場や洞穴、そして居酒屋で過ごしたのだった。

アレクサンドル・イヴァノヴィチ・レヴィトフ【Александр Иванович Левитов】(1835-78)も同じく放浪の生を辿った。全生涯において放浪して常に貧しく、酩酊していた。『ステップからのスケッチ』【Степные очерки】では、農民の惨めさとがさつさが驚くべき程に描写されている。しかし同時にこの本においては、極めて穏やかな自然描写、牧歌、子供たちの可愛らしい一幕が際立っており、私たちは命の無いもの——梁、長椅子、スカート、像——の話し声を聞くことになる。

続く作品集『村、道、そして街の悲しみ』【Горе сёл, дорог и городов】と『モスクワの路地の生活』【Жизнь московских закоулков】においてレヴィトフは、「教養あるプロレタリア」が酩酊している民衆の居酒屋【λαϊκές ταβέρνες】、無為に時の過ぎて行く家具の備え付けられた寒い部屋——充滿した湿度、食べ物、南京虫——を描写した。

これらの批評家と文学者たちの作品は、怒りと苦痛の叫びである。ロシア民衆【ο ρωσικός λαός】が暴政と無知、そして貧困によって落ちぶれてしまったことを示しながら、社会革命の必要性を喧伝していた。

この激しい急進的な運動が反動を招いたのも当然のことである——保守的知識人たちだ。とりわけ狭量な、反対の主義から文学的【φιλολογικά】作品が流通した。そこにおいて再び文芸技術は隷従をもって、とりわけその本性から他の目的に隷従した。

「若者」たちの中でも最も無慈悲な皮肉屋に、アレクセイ・フェオフィラクトヴィチ・ピーセムスキー【Алексей Феофилактович Писемский】(1820-81)がいる。最初期の短編は、犬儒派的皮肉も倫理的蜂起も交えずに、日々の生の最も悍ましく極めてありふれたもの事を描写した。

常にピーセムスキーの風刺は粗野で不公平なものになっていった。小説『千の魂』【Тысяча душ】はゴーゴリの『死せる魂』を思い起こさせる。若い主人公カリノヴィチ【Калинович】は、ゴーゴリの主人公チチコフよりも教養を備えている。ペテルブルク大学で学び、悪いことは何も企まず、あらゆる方法を用いてただ「千の魂【一千人の農奴】」の主人になろうとしていた。彼の内にある全てのことは、自身の目的を達成するために合法的であるように思われた。この作品でピーセムスキーは、乱暴な風刺で若い知識人たちの怠惰さと皮相さを風刺した。

続く小説では同様に、模倣できない程の言語的な力をもって自由主義的な改革後のロシア社会の支離滅裂と熱気を描写した。主人公は、上に上り、理想の自由と恋愛を見つけるという希望を抱いて外に逃げ出す市民階級の天敵である。しかし、ヨーロッパ人の各々に「香辛料の香る五コペイカ硬貨の臭いを嗅ぐため、至る所にその鼻を突っ込む」小乾物屋を見出すことになる。

ピーセムスキーは演劇作品も書いた。最良のものは『苦い運命』【Горькая судьбина】である——ロシア文学【φιλολογία】で初となるレアリズム的農民劇であった。農民のアナーニー・ヤコヴレフ【Ананий Яковлев】という主人公の形態は極めて強かった。人間の尊厳への同調心を持ち、

無力で寄生虫のような自分の主人に震えている奴隷のような存在ではない。アナーニーが、領主とその妻の間に生まれた子供を殺す瞬間は、極めて悲劇的に描かれた。この暗黒の劇においては、全ての登場人物が恐ろしい力、つまり、社会的必要というより若い運命【Εμπαρμένης】の無責任な道具なのだ。

新しい強制が、急進主義者たちの内でもヴィクトル・ペトロヴィチ・クリュシニコフ【Виктор Петрович Ключников】(1841-92)の小説『蜃気楼』【Марево】を呼び起すこととなった。主人公のインナ【Инна】は革命思想に魅了され、「真理と正義、そして自由」のために戦う新しい運動の若い指導者たちと知り合った。彼女は失望を感じ、これら全てのイデオログたちは互いに嫉妬し、権限を奪い合い、独善的な情熱を満たすという目的しか持たない貪欲な猛禽類なのだということが暴露した。不運な主人公は「生きようとする意欲と未来への信頼をなくして」打ち砕かれてしまった。

同じぐらいの激しさでもって急進主義者を攻撃した人物に、『四半世紀前』【Четверть века назад】や『転回』【Перелом】、そして『深淵』【Бездна】の三部作を執筆したボレスラフ・ミハイロヴィチ・マルケーヴィチ【Болеслав Михайлович Маркевич】(1822-84)がいる。「ニヒリスト」たちのことを害をなす精神であり頭の軽い者として表現し、絶えざる喪失の中であって、それと共に各々の救済の希望も失われていく、貴族たちの古い伝統を称揚した。

だがリアリストの著者が、祖国への狂信的な没頭によって苦い真実をしばしば告白を断つということはなかった。旧世代よりは優れているとして、では私たちは何者なのか。美学者として、私たちは「美」の存在を信じており、全てが許容されたものを見て、感情を抑えきれずに屈服する。では、あなたはこのような両親をもつ子供たちに何を期待するというのだろうか。

しかし、それぞれの派の良い点も悪い点も見抜いていた偏りのない知識人たちの最上の代表に、大作家のニコライ・セミョーノヴィチ・レスコフ【Николай Семёнович Лесков】(1831-95)がいる。

レスコフは貧しい官吏の息子で、オリョールで生まれたが早い段階で孤児になり商業会社の官吏に任じられた。官吏としてほとんど全ロシアを踏破し、全ての社会階級と知り合った。三十年以上してものを書き始めた。『どんづまり』【Некуда】という小説では、1848年に革命家として殺されたスイス人の息子である、社会主義者のライネル【Райнер】が主人公である。

ライネルは西ヨーロッパの中にも同志たちの内にも、高貴さも優れた精神的向上をも見出しはしなかった。ロシアに逃げ込んだ。この乙女たる地【έδαφος】に自分の理想を実現させようと望んだ。しかし、ロシア人革命家たちもヨーロッパ人たちより優れているようには見えず、そうしてポーランド人革命家と道を共にし、殺されることとなった。

ライネルに加えて、リーザ・バハーレヴァ【Лиза Бахарева】も輝かしい理想的形象として称揚される。彼女も革命家たちに失望してはいたが、旧世界は死に絶え、若く、よりよいものが生まれるべきだと断固として信じていた。しかし、ライネルの死を目にした時、リーザは打ち砕かれることとなった。彼と彼女にもはや「出口」は存在しないのだ。ロシアの革命家サークルはこ

の小説を怒りと皮肉をもって受け入れた。というのも、レスコフが冷酷な正確さと侮辱的な詳細さでもって急進主義者の中で誰もが知っている指導者たちを描写することに成功したからだ。

ユーモアと陽気さにあふれた、全く異なったレスコフの次の小説は『僧院の人々』【Соборяне】であり、聖職者の生活を初めて描写した小説である。自由主義者たちは、専制の聖職機関を文盲の搾取者であり追従者だとみなしていた。レスコフはよくロシア人聖職者たちを識り、愛していた。主人公は首席司祭のサヴェーリー・トゥベロゾフ【Савелий Туберозов】であり、偉大で、善と力に満たされた才人である。神を堅く信じ、人々を愛していた。彼は困難な三重の闘いを受け入れていた。つまり、無神論のニヒリストたち、無関心な知識人たち、最後に放蕩にふけり自己中心的な既得権益をもった聖職者たちと闘ったのだ。サヴェーリーは敗北したのだが、最後まで自分の理想に忠実であり続けた。この主人公に加え、他の二人の魅力的な形象も輝きを放っていた。優しく穏やかな司祭の妻と善良な大男アキレアスのような輔祭。彼らの周りに、レスコフは、力強い文芸技術をもって無数の真のロシア的典型——聖職者、官吏、士官、労働者、農民、乞食、放浪者、ユダヤ人——を動かすのだった。

レスコフがそれ以来刊行した全ての物語は、描写と模倣のできない言語的豊かさの点で力を発揮していた。主題や大胆さ、そして創造力とロシア的生への忠実な再現において、極めて多岐に渡っていた。しかし、レスコフを際立たせるのは主に彼の言語である。そもそも言語というのは単なる表現の手段であるばかりでなく、目的にもなるものである。レスコフは他に並ぶもの無い程巧緻に民衆【λαοῦ】の言語と教会の言い回し、格言、駄洒落、そしてロシアの地のあらゆる言語的宝庫を活用する。

常にレスコフを自分の師だと宣言していたマクシム・ゴーリキーは、熱狂的な同時代人たちには決して理解することは出来なかった彼を、「愛に溢れた懐疑主義者」と名付けた。レスコフは可笑しな習慣を、そして貴族や官吏たちに搾り取られ、貪欲で酩酊した民衆【λαός】の住む、この全ロシアを愛していた。民衆をそのあらゆる欠点でもってより高貴な徳を作ることのできる力あるものとみなしていた。しかし、この全き愛がレスコフの理性を濁らせることはなかった。同じ誠実さをもって良いことも悪いことも口にし、その故に孤立することとなり、保守主義者や自由主義者、そして急進派とも戦い続けることになった。

より限定的なものであるが、レスコフと同系の才能の持ち主にパーヴェル・イヴァノヴィチ・メリニコフ【Павел Иванович Мельников】(1819-83)がいた。メリニコフは近くで狂信的な復古主義者【Πλασιόπιστος】を知り、何か月も彼らと共に過ごした。『森の中で』【В лесах】と『山の中で』【На горах】という主要な小説において——極めて生き生きとした色彩と豊かな言語と叙事詩的偉大さでもって——彼らの生と戦い、そして迷信と倫理を描写した。

メリニコフは『クラシリニコフ家の人々』【Красильниковы】という物語の中で、若い思想の故に生じた親と子の仲違いを劇的に顕在化させた。素朴な労働者である老クラシリニコフは、産業家になり億万長者となった。熱狂的に父祖の習慣を維持している。各々の逸脱を罪だとみなし

ていた。だが、工業的実業の延長で学習が有用だということを野望だけでなく計算をもって息子に教えた。息子は勉学に励んで父に従い、父によって結婚の 때가迫っていることを思い起こされた日までは全てがうまくいっていた。息子は、老人が選んだ金持ちの花嫁を娶ることを拒否した。父は激高し、クヌートを取った。「お前も勉学を積んだのなら、儂の息子だろうが！」最終的に息子が、宗派が異なるだけではなく友人で金持ちの商人の家で先生として生計を立てているドイツ人の女性と婚約したことを知った。憤慨した老人は、ある日この女性に会い、数日後には亡くなってしまおう程に無慈悲に彼女を打ちつけた。「神よ、汝に栄光あれ。我が子はもはや自由だ！」と父は大声で叫んだ。しかし、絶望した息子は酒に溺れ身を滅ぼしてしまった。

彼らのような力強いリアリズム文学者【λογοτέχνες】に加えて、感じのよい女性の形象を有するナデージダ・ステパノヴナ・ソハンスカヤ【Надежда Степановна Соханская】(1825【1823】-84)がいる。貴族の女学校で教育を受け、それから村にある父親の家に帰って来た貧しい若者である。放浪者を養いながら、自分の人生を怠惰な兄弟たちに捧げた。自分に時間があるときにもものを書いた。第一作目『午後の訪問』【После обеда в гостях】(1858)を、次いで連作の『ある田舎の図書館から』【Из провинциальной галереи портретов【肖像画ギャラリー】】と『キリラ・ペトロフとナスターシャ・ドミトロヴァ』【Кирилла Петров и Настасья Дмитрива】等を刊行した。

ソハンスカヤの作品は、とても素朴で何の気取りもないが、生き生きとして誠実さと控えめな情熱に満ちている。新旧両方の人々にも参与しなかった。飾り気無く、見た物と聞いた物、そしてどのように生きたのかを描写した。ソハンスカヤは、醜悪で重要視されないような細部を細やかな詩情で包み込んだ。苦痛は人生に不可欠であり、かくして慰めを受け、遠い村にあっても忍耐強く苦々しくも卑しい自身の存在を甘受できるのだと信じていた。

自分自身の個人的な感情や無垢な自由主義的魂に加えて、この時代レフ・トルストイ【Лев Толстой】の第二の従兄であり小説家で詩人、そして劇作家でもあるアレクセイ・コンスタンチノヴィチ・トルストイ【Алексей Константинович Толстой】(1817-75)が際立っている。

アレクセイ・トルストイは熱狂的に美を崇拜し、人格は高貴で魅力に溢れていた。まだ子供だった時分よりヨーロッパを旅し、ヴァイマルでゲーテの面識を得た。「アポロンの老人」の偉大な姿を決して忘れることはなかった。

トルストイは、政党から距離を取って文学【φιλολογία】に身を捧げた。ホフマンの影響を受けた幻想的な物語や極めて美しい恋愛詩行を発表した。

友人のアレクサンドル二世が玉座に上った時、トルストイは文芸技術に専心するために宮廷儀典長の地位を捨てた。ただ新皇帝に「危険の無い真実の語り手」としていつも側にいることを約束し、この約束を守った。いつでも大胆な意見を持ち、不正を犯される側——人々つまり民衆【λαός】——のために尽力したのだった。

トルストイのムーサは多産であった。全ての作品において高貴な詩人の才が姿を現し、自由主義的な思想が述べ伝えられる。『ダマスクスのヨハネ』【Иоанн Дамаскин】において、主人公は

トルストイ自身の投影である。カリフは彼に栄誉と財産を与えたが、敬虔な讃美作者は外に出て自由に生き、世の喧噪を離れて神への賛美を書くことの方を好んだ。「神は暴力を愛さず、自由な思考への制限を愛しはしない。思考は、自由な魂から生まれ、束縛の中で死に絶えることはありえない」

トルストイは、その全生涯において自由を強調した。この故に彼は、いかなる政党にも属することが出来なかったのだ。変質した「左翼の」専制者だとみなしていたので、急進派を憎んでいた。トルストイはこれらの思想を自身の優れた小説『セレーブリャヌイ公』【Князь Серебряный】の中で主張している。公爵はイヴァン雷帝の時代に何年もポーランド人と戦っていた。モスクワに帰還した時、皇帝の残忍な行いを見て深い悲しみに捉われたのだった。

まさにこの暗黒の時代から、トルストイは有名な三つの劇を創作した。1) 傑作と言っても過言ではない程に専制皇帝の最後を描いた『イヴァン雷帝の死』【Смерть Иоанна Грозного】。2) 『皇帝フョードル・イヴァノヴィチ』【Царь Фёдор Иванович】は雷帝の息子で、極めて穏やかで感じのよい人物だったが、帝国に必要であるもののうち何の美德も悪徳も持たなかった。あらゆる方法を用いて大地に平和をもたらす、敵たちと和解して愛を持って統治しようと欲した——そしてまさにこの故に、彼の兄弟は殺害され、王朝も崩壊して全ロシアの自由が危険にさらされることとなった。自身の兄弟の死を知らされた時、叫びながら妻のイリーナ【Ирина】の胸元に崩れ落ちた。「私はただ善を望んだだけだったのだ……。ただ平和と愛を望んだだけなのだ！」善良なる神よ、なぜ私を皇帝にしたもうたのか？ 3) 「皇帝ボリス」【Царь Борис】。ボリス・ゴドゥノフ【Борис Годунов】は玉座に上り詰め、強力な新ロシアを創造する野心を抱いていた——しかし、この高潔な目標のためにしばしば不名誉で非人間的な手段を用いたために失敗してしまい、自身の良心も擦り切れ全民衆【ὁλος ο λαός】が彼に対立することとなった。

トルストイの自由主義的で善良な魂は、タタールの専制を持ったモスクワ時代を憎み、昔のキエフ・ロシア司教時代を愛していた。スラヴの血に対し自分たちの血を統治者として混ぜたヴァリャグを愛し、英雄と皇帝の民衆に対する善良さと気遣いを賛美した。トルストイは、このようにキエフを理想化しタタールのモスクワに対置させた。

トルストイの全作品の中で最重要なものに風刺がある。「この場所に秩序を定めるために」ヴァリャグを呼んだ時代からの全ロシア史をユーモアと力強さをもって描写した『ロシア国家史』【История государства Российского от Гостомысла до Тимашева】がそれである。

検閲が禁じた『種の起源』【Происхождение видов】においては、詩人は検閲者を皮肉り、かの者が創造の時に存在していたのか、オラウータンは神が取って人間を作った元の泥よりも劣っているのかと問い質した。

トルストイの「神秘」である『ドン・ジュアン』【Дон Жуан】も興味深いもので、これはゲーテのファウストとホフマンの幻想的な物語から影響を受けたものである。トルストイのドン・ジュアンは低俗な女たらしではなく、男性という存在を満ちし補完することのできる真の女性を不安の内に探し求める理想主義者である。しかし、自身の恋愛に失望し肉体的快樂だけがいつまでも

小さくも確かな善として残り続ける。

最終的には、かくも欲していた⁵ 完璧な女性ドナ・アンナ【Донна Анна】がやって来たが、遅すぎだった。ドン・ジュアンは彼女を識ることなく、彼の欲求も地に落ちてしまった。ドン・ジュアンは女性の死んだその時だけ目を見開き、絶対的幸福の神々しき機会を逸したことを目にしたのだった。

晩年の大作詩『肖像』【Портрет】において、トルストイは「ピグマリオンとガラティア」の古い神話を極めて新しい方法で再現した。主人公は感受性が強く夢見る十一歳の少年である。父親の画廊にある一枚の肖像を愛していた。彼には、肖像の若い女性は生きているが、額縁の中で魔法によって動けないのだと思えた。彼女を救ってあげなければならない。

ある夜、少年は震えながら画廊に忍び込んだ。月が肖像画を照らし、少年は若い女性が少しずつ生気に溢れ、壁からすり抜けて微笑みながら自分の目の前に立つのを見た。少年は、狼狽しお辞儀した。女性は少年が踊りに誘ってくれたのだと思い、小さなエスコートを抱擁し喜びに満たされて踊り始めた。しかし少年は泣き始め、女性は彼を胸元に引き寄せた。その時の余りの甘美さに少年は気絶してしまった。意識が戻った時には、肖像画のあった部屋の長椅子の上に横になり、自分の周りには親や叔父、医者がいて、少年の不思議な病気を心配しているのを目にすることとなった……。

トルストイは、同時代の敵意を持った政治と距離を取りながら、このように極めて穏やかな文芸技術の作品を生み出すことに成功したのだった。全生涯を通じて、政治的・精神的自由は優れた文芸技術の前提条件だと信じていた。

2. 演劇

ニコライ一世の専制的な軛の下で、演劇は厳格な検閲を課された。ほんのわずかな自由主義的灰めかしを内包する作品でさえも厳しく禁止された。しかし、ペテルブルクとモスクワという二大首都か田舎においてのみ演じられ得たのだが、政府の許可が必要であった。このように、ロシアの現実の生を舞台に上げる作品の創造は不可能であった。

しかしこのような息苦しい雰囲気の中にあっても偉大な劇作家が現れ、アレクサンドル二世の時代にはロシアの全ての幕を支配した。オストロフスキーである。

アレクサンドル・ニコラエヴィチ・オストロフスキー【Александр Николаевич Островский】(1823-86) は弁護士の息子としてモスクワに生まれ、法学を学んでモスクワの商業裁判所に任じられた。このように、若い時期から保守主義者や司教たちの商人の「暗黒の帝国」をよく識り、彼らを極めて忠実に劇作品の中で創作したのだった。

オストロフスキーはロシア演劇の真の創造者だとみなされている。四十に及ぶ劇作品に加え、

5 Ἰδομένως 2013: 374 ここでの「欲していた」はクレタ方言の πεθύμησε である。

真のロシアの典型を創造し、申し分なく舞台芸術というものを知っていた。自分の主人公たちを商人という新しい市民階級から取った。昔の首領たちにも農民たちにも関心を持つことはなかった。ゴゴリのように風刺家でもなかった。彼は他でもない風土記作家【ηθογράφος】だったのだ。自分自身で告白しているように、「風土記【ηθογραφία】をもって民衆【λαός】を啓蒙する」という野心を抱いていた。

初期の喜劇『内輪同士はあと勘定』【Свои люди - сочтёмся!】は大きな印象を与えた。商人たちはこの喜劇が自分たちの階級を攻撃しているとみなし、禁止させることに成功した。

絶えずオストロフスキーの名声を強めた何頁にも及ぶ喜劇『他人の櫂には乗るな』【Не в свои сани не садись】や『貧乏は罪ならず』【Бедность не порок】等が後に続いた。スラヴ派は、好感の持てる色調で「広大な自然」とスラヴの善良さが描かれていたこれらの喜劇を熱狂的に受け入れたのだった。

この初めの時期に属するオストロフスキーの最上の作品は、優れた構想と演劇的な動きを有した喜劇『雷雨』【Гроза】(1860)である。若きカテリーナ【Катерина】は未開で【βάρβαρα】蒙い習慣を啓蒙したが、この主人公は好戦的な人物ではなく優しく感受性の強い魂である。彼女には夫として、恐ろしい鬼婆であるカバーノヴァ【Кабанова】の、痩せて心優しい息子があてがわれた。しかしある日、「他のもっと良い世界からやって来た」ボリス【Борис】に出会った。彼はカテリーナがもっと良い者として夢見ていた人物を体現していた。嵐が起こった。カテリーナは、夫婦の義務と彼女を高揚させるこの偉大な愛の間で戦い絶望していった。唯一の出口は死であった。カテリーナは死に、この鬼婆は息子に「お前さん恥ずかしくないのかい？ こんな女の為に泣くなんて罪深い！」と叫んだのだった。

オストロフスキーはシェイクスピアの影響下にあり、野蛮な十六世紀から主題を取った歴史劇の、新しい一連の劇作を始めた。過去の未開の【βάρβαρης】生の広範な表象や極めて生き生きとした対話、民衆【λαός】の力強い演劇的仲介である。雷帝イヴァンを愛の網に引き込んだ艶めかしく野心を抱いた貴族女性【βογιάρα】である『ヴァシリーサ・メレンチエヴァ』【Василиса Мелентьева】という悲劇(1863【1867】)は、オストロフスキーの創造の第二期において例外的な位置を占めている。

しかし、オストロフスキーはすぐに再び社会演劇に戻り、今や更に大きな幅を与えたのだった。アレクサンドル二世の改革の後で、ロシア社会は新しい成熟段階に入った。貴族、農奴、商人、知識人たちが転覆した。無意識の搾取者や実業家という若い市民の典型が支配的になり始めた。昔の領主たちでは農奴の働きなしに開墾することができなかった貴族たちの地所を購入し、没落した貴族令嬢と結婚し富を蓄えた。

オストロフスキーはこの新しい社会から豊かな主題を組み尽くす。喜劇『狼と羊』【Волки и овцы】と『あぶく銭』【Бешеные деньги】においてはロシア的生の若い習慣が生き生きと反映されている。老貴族がため息をつく。「また金が今日も目を覚まし、したたかな奴らの所にだけ行って、農らの所には来やしない。旧き善き日には金は馬鹿で、農らが働かなくともポケットに入っ

て来てくれたのになあ。賢い金は自分の骨折りで稼ぐもんだ。こいつは静かに静かにしとる。こっちに来て農らのポケットに入って来いと叫んでも、動きやしない……。『俺はてめえらがどんな金を望んでるのか知っているぞ。馬鹿め。誰が行ってやるもんか』なんていう始末だ」

晩年、オストロフスキーはモスクワと演劇学校の帝国劇場長に任じられた。ロシア劇を刷新するのだという偉大な計画があり、全てをその実現のためにつぎ込んだ。しかし、過労により病気に罹り死んでしまった。

オストロフスキーはロシアで最も偉大な劇作家である鋭敏な生の観察者であり、作品の筋書きには古典的な単純さがあって、彼の幕は驚くべき自然さと穏やかさをもって展開する。劇は突然極めて自然な形で始まる。著者は計算などしていなかったかのようだが、出来事の衝突によって始動していく。あなたも、オストロフスキーが大衆の笑いや叫びを喚起するために主人公たちを表象しているわけではないということは感じるだろう。単に日常生活の人間として主人公たちを表現して彼らを人々の触れ合いの中に置いたが、その触れ合いから——諸性格の差異から、つまり偶然の出来事から——劇やドラマが立ち現われてくることになるのだ。

3. 抒情詩

この熱気に満たされた時代にはいつでも、自由な抒情性に対する強大な敵が二つあった。皇帝の検閲と急進主義者の教条的な頑迷さである。前者があらゆる自由主義的な声を圧迫し、後者が文芸技術を社会革命的なプロパガンダに隷属させたのであった。

このように頭の固い功利主義的な批判が多くの価値のない詩人たちを熱狂的に称揚し、多くの抒情詩人たちの歩みを変えさせたのであった⁶。

この過渡期中で最も有名な詩人に、疑いの余地もなくネクラーフがいる。ニコライ・アレクセエヴィチ・ネクラーフ【Николай Алексеевич Некрасов】(1821-77)は粗野で教養のない士官の息子であった。母親は優しく感受性の強いポーランド人であった。両親の正反対の性質が彼の魂の中に形を得ることとなった。ネクラーフの子供時代は痛ましいものであった。後に、詩人は自身の歌の中で恐る恐る子供時代を思い起こしている。「母さん、なぜ母さんが泣いているのか知っているよ。母さんの痛みは知っている。—どれほど沈黙して謙遜に隷属の軛に耐えているのか知っている。—しかし、母さんの魂は勢いに満ちていた。—いや、気高く美しい高貴さと隠された力に満ちたされている」

父親は彼を無理やりペテルブルクの軍学校に送った。しかし若いネクラーフは、大学に通いたかった。そうして父は怒り狂い、送金を止めた。ネクラーフにとって長く恐ろしい飢餓の時代が始まったのだ。本人が「学校生活を通していつも私は飢えていた」と告白している。飢餓に疲れ果て、家賃を払うことができなかったので部屋から追い出され、恐ろしい寒さの中

6 *Idomenios* 2013: 367 ここでの「変えさせた」はクレタ方言の *παρασταράτισε* である。

テルブルクの路上を彷徨った。レストランの外で雪の上に座り、昏睡が支配し始めた。通りがかった乞食が彼を起こし、何も食べなくとも眠れるようにと夜の逃れ場に二人で行ったのだった。

悍ましい困窮の中でネクラーフは『夢と響』【Мечты и звуки】という第一作目の歌を書いたが、浪漫主義的な詩行の創作としては値打ちの無いものであった。ベリンスキーはそっけなく、詩作の才を有さない若者たちは書くのを止めなければならないと書いた。しかしネクラーフは、失望することがなかった。厳格な批評に対し『路上で』【В дороге】という新しい歌を書いた。ベリンスキーは熱中し、この若い詩人の胸元に落ちた。その時からこの二人の文学者【λογοτέχνης】は堅い友情で結ばれたのだった。

ネクラーフは、貧しい人々と不正に苦しむ人々の熱い擁護者であった。社会の不正を断罪し、民衆の自由のために戦う全ての人々と協働する目的を以て自分の詩を「復讐と苦痛のムーサ」と呼んでいた。

ネクラーフは生の日常的で卑屈なものから、つまり取るに足らない些細なことから、劇的で広範な光景【οράματα】にまで拡張させていく稀有な才能を有していた。詩『鉄道』【Железная дорога】が特徴的である。詩人は、列車の中で次の言葉を聞いた。——「お父さん。誰がこの鉄道を作ったの、と子供が尋ねた。父親は答えた—我が子よ【χρυσό μου】、大臣が造ったんだよ！」この短い対話から、ネクラーフは偉大な悲劇的幻へと飛び込んでいった。鉄道の線路が伸びていった土から何千人もの労働者が飛び出し、体が冷たくなって、飢え、疲れ切って、鉄道で働きながら死んでいく。朝から夜まで働き、監督たちは彼らを打ち、請負業者たちは彼らを欺いて正当な賃金を支払わない。偉大な光景【Οραμα】であり、第二の恐ろしき表象である。

ネクラーフの多くの詩において、人間的な苦痛は耐え難いものである。田舎の老婆が、兵隊に取られたが、病を得て帰って来て今や傍で死にかかっている息子を悼む。この尊敬すべき下級官吏は至る所で追い回され、「人類の恩人」として有名な上官を探しにペテルブルクに向かうのだが、この男は彼を酔っ払いだとみなしたので追っ払い、そうしてこの不運な詩人は絶望して酒に溺れるようになった。

ネクラーフはデカブリストの時代の話である『ロシアの女たち』【Русские женщины】という長大な抒情詩【επικολυρική】も書いた。トルベツカヤ【Трубецкая】とヴォルコンスカヤ【Волконская】という皇女たちは夫たちを追ってシベリアに向かう。詩人は類稀なる技量で、シベリアの雪の積もったステップへの恐ろしく耐え難い行進の中に、過去の尊厳ある生と主人公の女性たちの以前の幸福を差し挟んだ。それと共に、民衆の自由のために死んだあらゆる殉教者の形象が私たちの前で閱兵式を繰り広げるのだ。

他の詩においてネクラーフは、農民女性の英雄的行為【ηρωισμό】を称賛する。ダリア【Дарья】は夫を亡くしたが忍耐強く苦痛に耐え、死装束を施して自分一人で死体を雪車に乗せ、墓場にまで運ぶ。残された子供たちが凍えてしまわないように、後で薪を集めようと森に行っ

た。疲れ果てて雪の上に座り、眠たくなって凍え始めた。その時混濁した理性の中で、彼女の全人生が駆け巡った——質素で素朴で、喜びが少ないのに苦痛は多く、最後には見よ、彼女を迎えるため永遠の静寂の内にある水晶宮殿に氷の王様が現れるのだった。

主要作品『誰にロシアは住みよいか』【*Кому на Руси жить хорошо*】において、ネクラーフはロシア民衆【*ρωσικὸύ λαού*】の全体像を与えるという野心を抱いた。しかし未完のままに留まった。七人の農民たちが、ロシアで幸福に生きているのは誰かを知るまでは村に帰らないと誓うところから始まる。残存している限り断片は、農村の生や聖人祭、そして圧制者たちに冷酷に復讐する農奴たちを素晴らしく描写している。この詩の全体が、貧しくも豊穡で、余りにも無力だが全能な、そして虐げられている「母なる【*μητερούλα*】」ロシアで織りなされた、熱くて感じのよい讃歌なのだ。

もしネクラーフが時代の要請した主題に、つまり祖国と社会のプロパガンダに限定されてしまっていたとしたなら、今日では絶対に忘れ去られていたことだろう。作品の中でも今尚残っていて且つ抒情詩において高い地位を保証せしめているものは、自然の気取りのない素朴な諸描写と、永遠の敵——飢え、寒さ、死——と戦う農民に対する永遠の人類的苦痛である。

しかし、まさにこれらの詩を同時代人たちは軽蔑していた。ただ詩行創作の革命主義的な修辞のみが、文芸技術の高みを上っていたのだった。そしてドストエフスキーが、彼が発した葬儀の口上において、ネクラーフの国民【*εθνικά*】詩はプーシキンやレールモントフの詩と同じように地位につくだろうと言った時、偉大な口を有した吟遊詩人たちの死を嘆き悲しんでいた革命家の若者たちは、「もっと高くへ！」と叫びながら彼を遮ったのだった。

詩人コリツォフと同時代人であるイヴァン・サヴィチ・ニキーチン【*Иван Саввич Никитин*】(1824-61)も貧しい人々と不正に苦しむ人々の擁護を自身のムーサの目的として定めていた。父親は自身の財産を飲酒で浪費し、食堂を開かざるを得なかった。しばしば御者や農民の客たちと一緒に酩酊して食堂を切り盛りしていた息子を殴っていたのだった。

しかし若いニキーチンは、自由な時間に詩を書いた。クリミア戦争勃発直後に刊行した『ルーシ』【*Русь*】と『信仰のための闘い』【*Война за веру*】は大きな印象を与え、種々の文芸サークルが「新しいコリツォフ」として食堂詩人を歓迎した。彼が出版した詩の選集と韻律のついた物語『搾取者【*Κλάκ*】】【*ο Εκμεταλλευτής / Кулак*】により、ニキーチンはパトロンを獲得し、食堂を放棄して小さな街のヴォロネジに本屋を開いた。

ニキーチンは多くの点でコリツォフに似ている。感性の飾り気の無さと誠実さ、素朴さと人間的苦痛。しかし、彼らの間には次のような大きな違いも存在する。コリツォフは自身の周囲の自然と完全な調和の内にいるが、一方でニキーチンにおいては自然の穏やかさと内的な嵐の魂との間で激しい対立が起こっている。

ニキーチンは、地主たちの専制に対しても農奴たちの隷属に対しても奮起することもない。彼の二つの難敵は、都市の血を吸う中産階級と貧しい農民の血を飲んでいる豊かな農民であるク

ラーク【Κουλάκος】である。ネクラースフのようにニキーチンもその鎖を解く力を持たない世代を嘆き悲しんでいた。

この時代の多くの詩人、何よりも風刺作家たちは同じ理想のために闘っていた。社会的闘争者やしばしば自由の殉教者として、これらの詩人たちは人々に訴えかけていた。しかし彼らの詩行創作は、素朴な韻律のついた修辭と祖国愛的な興奮であった。

他にも、彼らの時代の社会の成熟に介入しながらも度を越した情熱は持たなかった、何人かの詩人たちがまだ残っている。

ヤコフ・ペトローヴィチ・ポロンスキー【Яков Петрович Полонский】(1820-98)はロシア社会の浮かれ騒ぎに激しく関わっていかずにはいられなかった。「詩人もロシアという大海の波であり、詩人も動かねばならないのだ。詩人も全身体組織の一つの神経なのだから、自由が傷つけられる時は詩人も傷つくはずなのだ」とポロンスキーは言っていた。

しかしポロンスキーは、自分の文芸技術の全てをその時代の激しい情動に従わせようとはしなかった。「空虚な戦の叫びは放っておけ。嘆くんじやない！ あなたの胸から音楽のように声が出て、花で苦痛を飾り立て、愛を通して真実へと私たちを導いてくれ」

ポロンスキーは、この現実には忠実であって温和で愛されるに値する人物で、大袈裟に話すこともない牧歌的な詩人である。あらゆる詩は子供に関する話題から直観を受けており、極めて美しい詩である。降誕祭の木が欲しくて仕方がなかった貧しい子供がいた。モミの木の枝を切りに森に行ったが闇夜に覆われて、子供は疲れ果てて雪の上に倒れてしまった。少しずつ眠気に襲われて死が降りて来た。だがくらくらする脳の混濁の中で、子供は降誕祭の木を、しかもその上には彼が欲しかった玩具が皆かかっていたのを目にしたのだった。

ポロンスキーの傑作は、色とりどりの蝶を愛する『音楽家のキリギリス』【Кузнечик-музыкант】である。痛ましくも感動的な冒険の後で、愛する者は最終的にカーネーションの下で自身が愛した者が死んでいるのを見つけた。そしてその時、全ての虫がやって来てこれを墓地へと連れて行くのだった。

同じく温和で夢見がちな人物として、ウクライナ人の父とギリシア人の母の息子のニコライ・フョードロヴィチ・シセルビナ【Николай Фёдорович Щербина】(1821-69)もいた。当時大規模なギリシア人居住地区があったタガンログで学んだが、ギリシアに対する愛で養われることとなった。全生涯を通してシセルビナは決して見ることは叶わなかったが、母の国を見ることを欲していた。ただ根気よく燃え盛る情熱と理想化された色彩をもって浪漫主義的な詩行の内でギリシアを賛美し続けた。青く晴れ渡った天、白い大理石の石柱、薔薇の冠を身に着けた奴隷の子供たち。

このサークルの最も興味深い人物に、宗教的な汎スラヴ主義の指導者の一人で、熱狂的なスラヴ派のアレクセイ・ステパノヴィチ・ホミャコフ【Алексей Степанович Хомяков】(1806-55)がいる。

ホミャコフは唯物論と西方文化の敵対者であり、ただ正教会のみがロシアの民衆の文明の基礎になりうるものであり、世界の救済の模範になりうるのだと喧伝した。

このために「ミール」、つまりこの大地の真のロシア的社会を組織せねばならなかった。ただミールだけが倫理的で、西方が考案し適応できたものよりも更に優れた基礎を有するのである。ただミールだけが人類協働の完全なひな型なのだ。

ホミャコフはこれらの理想をよく響く壮大な詩の中で喧伝した。そしてホミャコフがスラヴの謙遜さと優美さを賛美している時も、その詩行は勢いと情熱に満たされていた。

反対に、ムーサを革命や保守イデオロギーの手段に変えてしまったあらゆる詩人たちに対して、儂い政治的情熱から自分たちの文芸技術の独立を維持した、少なくとも次にあげる詩人たちがいたこともまた明らかである。誇りを以て「自由な文芸技術の自由な奉仕者」と言われていたように、また象徴としてプーシキンの「私たちは情熱のために、穏やかな音と関心のために生まれてきたのだ」という詩行を有していた。

これらの「ごまかしのきかない」抒情詩人たちの内で最も重要で、且つプーシキン以降のロシアの最重要な抒情詩人としてフョードル・イヴァノヴィチ・チュツチェフ【Фёдор Иванович Тютчев】(1803-73)とアフナーシー・アフナーシエヴィチ・フェートがいる。

チュツチェフの最初の詩は完全に人目に触れることなく過ぎ去っていった。早くも1854年に自身初となる詩の選集を刊行した。トゥルゲーネフがすぐに情熱的な批評を発表した。「チュツチェフはあらゆるアポロ的な兄弟たちよりもはるか高い地点に立っている。ただ彼だけが自身の生でもって詩的な力と調和の均衡を図ることに成功したのだ。豎琴には抒情的な弦が一本しかないが、それは思索の結果ではない。木の実のように成熟したのである」

チュツチェフは、多くの年月をロシア国内にあって外交官のように生きた。彼の偉大な模範は常に抒情的なゲーテであった。ある詩において、チュツチェフは彼を「人類という高い木の上で最も成熟した葉」だと称えた。チュツチェフは、ゲーテの広範な汎神論の水を浴びたのだった。全生涯を通じて偉大な指導者の豊穡な命令に従った。抒情詩は、生の「出来事」から生じるべきであり、抽象的な思考からではない。

チュツチェフは目に見える世界の背後に別の物を、人間の感覚ではただ眺めることしかできない、もっと真実に知覚より高貴なものを感じていた。言葉にはこれを刻印することができないのだ。この容易に近づくことのできない世界をチュツチェフは「自然」と名付けた。あらゆる詩においてこの神秘の世界を欲し、感覚を越えた真の現実に自我を探求して表すために闘った。「あなたの耳を世界の調和にそばだてて沈黙せよ！」

しかし、この調和は見知らぬものの本質ではない。チュツチェフは極めて深く浪漫主義的であり、彼の「見知らぬもの」は恐ろしい神秘的な混沌、「燃え盛る深淵」として表象され、人間は身の毛もよだつ絶壁の唇の上で、寂しく裸のままにいるのだ。

ロシアの偉大な哲学者ソロヴィヨフ【Соловьёв】は、チュツチェフについて正しくも「おそらくゲーテ本人も存在の漆黒の根をかくも深く掴み、かくも透明に生の神秘に満ちた基礎をチュツ

チェフ程に認識することはなかっただろう」と言った。

チュッチェフの他に同じ高みに立つ者として、繊細な抒情詩人で、言葉を巧みに飼い慣らした偉大な人物、アフナーシー・アフナーシエヴィチ・フェート【Афанасий Афанасьевич Фет】(1820-92)がいる。全生涯を自分の地所で生き、大地の耕作と詩的創作に身を捧げた。彼は不屈で、時代の政治・社会闘争から距離を取った。農民たちの解放は、本人が言っているように、「子供の好奇心」を引き起こしただけだった。

フェートは極めて澄んだ抒情詩人であった。—— 神、愛【έρωτα】、自然 —— といった永遠の要素を賛美した。言葉と韻律でもって言葉にならないものを言葉にすることに成功した。彼の自然との接触は深くて高尚であり、奔放な情動や支離滅裂な恍惚とは無縁であった。極めて控えめで繊細に、神秘的な雰囲気と身の毛のよだつ来世を表現した。詩において決して物語ることはなかった。純粋な抒情詩人であったのだ。全ての詩の文体は客観的で曖昧な感覚であり、魂の神秘的な揺れ動きである。

彼の時代を大荒れにさせていた社会的・哲学的な問題について書くことは決してなかった。田舎から出て来た人物なのだ。この大地との密接な接触において、汎神論者であり放蕩にふけると同時に絶えず詩行の働き手であった。当然のことではあったが、同時代人たちが彼に関心を払うことはなかった。ほとんど人目につかず生き、死んでいった。彼を識る急進主義者たちは、社会に対するエピクロス主義的な無関心の故に彼を軽蔑していた。ただ後になってのみ、正当な地位に引き上げられた —— プーシキンとチュッチェフの隣に。

参考文献[□]

- ΙΔΟΜΕΝΕΩΣ, Μαρίνος (2006) Κρητικό Γλωσσάριο, Ηράκλειο: Βικελαία δημοτική Βιβλιοθήκη.
 ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗΣ, Νίκος (1999) Ιστορία της ρωσικής λογοτεχνίας, Αθήνα: Εκδοσεις Καζαντζάκη.
 ΦΙΛΙΠΠΙΔΗΣ, Σταμάτης (2017) Έξι και ένα μελετήματα για τον Νίκο Καζαντζάκη, Ηράκλειο: Βικελαία Δημοτική Βιβλιοθήκη.
 福田耕佑 (2018) 「翻訳 ニコス・カザンザキス (1999)『ロシア文学史』アテネ」『東方キリスト教世界研究』2: 32-60. 東方キリスト教圏研究会.
 福田耕佑 (2021) 「翻訳 ニコス・カザンザキス (1999)『ロシア文学史』アテネ」『東方キリスト教世界研究』5: 25-62. 東方キリスト教圏研究会.

*謝辞

ロシアの人名や地名、及び書名などに関する日本語表記及びキリル文字表記に関しては、在カザフスタン共和国日本国大使館専門調査員横江智哉氏に助力いただいた。ここに感謝の意を表明する。

7 原著では参考文献は挙げられておらず、ここで示したのは訳注時に利用した参考文献である。